

# 下小塙屋敷裏遺跡 多比良壱ツ家遺跡

—小規模農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

---

2021

高崎市教育委員会

# 下小塙屋敷裏遺跡 多比良壱ツ家遺跡

---

一小規模農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

2021

高崎市教育委員会

## 序

高崎市は、関東地方の北西部に位置し、平成の7市町村の大合併により、人口37万人を超える群馬県内最大の人口を擁する中核都市となりました。古来より上信越を結ぶ交通の要衝として栄え、高速道路や新幹線が整備され、全国有数の交通拠点都市もあります。

本市には文化財が数多くあり、中でも国指定特別史跡である多胡碑・山上碑・金井沢碑の「上野三碑」は、その歴史的価値が認められ、平成29年10月にユネスコ「世界の記憶」に登録されました。さらに令和2年3月には、古代多胡郡の役所跡の一角をなす「多胡郡正倉跡」が、多胡碑の碑文の内容と関連した重要な遺跡として、国指定史跡に新たに指定されました。この指定を契機に、本市の文化財の価値が広く注目されることを期待します。

本書は、小規模農村整備事業に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。下小塙屋敷裏遺跡は旧高崎市域、多比良壱ツ家遺跡は吉井地域で、各々の調査で特色ある遺構・遺物が発見され、貴重な資料を得ることができました。今回の発掘調査により得られた資料を後世へと伝え、本書を通して高崎市の歴史解明と郷土理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本報告書を刊行するにあたり、多大なるご理解、ご協力をいただきました地元関係者の皆様、関係各機関の方々に厚く御礼申し上げ、序といたします。

令和3年3月

高崎市教育委員会

教育長 飯野真幸

## 例　　言

1. 本書は下小塙屋敷裏地区ならびに多比良壱ヶ家地区における小規模農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査の事項は以下のとおりである。

下小塙屋敷裏遺跡　遺跡番号　高崎市遺跡番号785

地　番　高崎市下小塙町257番地6ほか

多比良壱ヶ家遺跡　遺跡番号　高崎市遺跡番号786

地　番　高崎市吉井町多比良177番地ほか

調査体制　教　育　長　飯野 真幸

教　育　部　長　小見 幸雄

文化財保護課長　角田 真也

埋蔵文化財担当課長補佐　神澤 久幸・矢島 浩(令和元年度)・清水 豊(令和2年度)

埋蔵文化財庶務担当　滝沢 匠・閑口 芳治・小暮 里江・岡田 清香

埋蔵文化財調査担当　下小塙屋敷裏遺跡：奈良 祥吾(主事)

飯島 克巳(再任用職員)

多比良壱ヶ家遺跡：小根澤雪絵(主任学芸員)

3. 発掘調査ならびに整理期間は以下のとおりである。

下小塙屋敷裏遺跡　発掘調査　令和2年1月6日～令和2年3月24日

整理期間　令和2年4月1日～令和3年3月29日

調査面積　282m<sup>2</sup>

多比良壱ヶ家遺跡　発掘調査　令和元年12月26日～令和2年3月26日

整理期間　令和2年4月1日～令和3年3月29日

調査面積　1,350m<sup>2</sup>

4. 本書の編集ならびに執筆は飯島、小根澤が行った。

5. 遺構・遺物出土状況写真の撮影は下小塙屋敷裏遺跡においては飯島・奈良が行い、多比良壱ヶ家遺跡においては小根澤が行った。遺物写真撮影は下小塙屋敷裏遺跡については飯島が行い、多比良壱ヶ家遺跡においては原誠二(文化財保護課臨時職員)が行った。

6. 多比良壱ヶ家遺跡においては、7区～10区の遺構測量を(株)測研に委託して行った。

7. 遺構図の作成は、各遺跡において調査担当者の指示のもと文化財保護課臨時職員が行った。

8. 下小塙屋敷裏遺跡においては、遺物実測図ならびに観察表の作成は(有)毛野考古学研究所に委託して行った。一部編集過程で変更した部分がある。

9. 多比良壱ヶ家遺跡においては、出土金銅製品の保存処理を株式会社芸匠へ委託し、自然科学分析を(株)パレオ・ラボへ委託した。

10. 発掘調査の資料ならびに出土品は高崎市教育委員会文化財保護課で保管している。

11. 発掘調査に当たり、下記の機関ならびに個人より多大なるご協力をいただいた(敬称略)。

高崎市農政部田園整備課　高崎市吉井支所建設課　吉井町多比良地区区長

地権者の方々　外山 政子　永井 智教　中村 岳彦

## 凡　例

1. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行 1/25000（電子地図）、高崎市都市計画図 1/2500、吉井町都市計画図 1/3000（昭和 42 年）をもとに作成した。
2. 本書の座標値は平面直角座標 IX 系国家座標（世界測地系）を用い、方位は同座標北である。
3. 遺構図ならびに遺物図の縮尺は各図に表示した。
4. 掘図中で用いる遺構名の略称は以下の通りである。  
SI：竪穴住居跡 SK：土坑跡 SP：柱穴跡 SN：富跡 SD：溝跡 SX：性格不明遺構
5. 土層ならびに遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会事務局ならびに（財）日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』を使用した。
6. 火山噴出物には次の略号を使用した。  
As-A：浅間 A テフラ（西暦 1783 年） Hr-FA：榛名二ッ岳渡川テフラ（6 世紀初頭）  
As-B：浅間 B テフラ（西暦 1108 年） Hr-FP：榛名二ッ岳伊香保テフラ（6 世紀中頃）  
As-C：浅間 C テフラ（3 世紀末～4 世紀初頭）
7. 多比良壱ヶ家遺跡で使用した遺物のスクリーントーンは以下のとおりである。遺構のスクリーントーンについてはそれぞれ遺構図に表示した。  
須恵器断面 土質質須恵器断面 内黒土器内面
8. 遺物観察表の数値は、以下の通り表記した。  
数値のみ：完存値 ( )：復元による推定値 [ ]：欠損状態の残存値
9. 遺物観察表の胎土に含まれる混入砂粒の粒径区分は、0.9mm 以下を細粒、1～1.9mm 以下を粗粒、2mm 以上を粗礫として記載した。
10. 各住居跡平面図中の「●」記号は遺物出土位置を示す。また、出土位置に付した番号は遺物実測図の番号と一致する。



# 目 次

序

例言 凡例

目次・挿図目次・表目次

## 下小塙屋敷裏遺跡

第1章 調査に至る経緯	2
第2章 遺跡の位置と周囲の歴史的環境	2
第3章 調査の方法と遺跡の概要	3
第4章 遺構と遺物	4

## 多比良壱ツ家遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過	30
第1節 調査に至る経緯	30
第2節 調査の経過	30
第2章 遺跡の立地と環境	30
第1節 遺跡の地理的環境	30
第2節 遺跡の歴史的環境	30
第3章 調査の方法	34
第1節 遺跡の調査・記録方法	34
第4章 遺構と遺物	34
第1節 基本土層	34
第2節 竪穴住居跡 (SI)	37
第3節 土坑跡 (SK)	41
第4節 杜穴跡 (SP)	43
第5節 亂跡 (SN)	43
第6節 溝跡 (SD)	43
第7節 性格不明遺構 (SX)	54
第5章 自然科学分析	55
第6章 調査成果	57

多比良壱ツ家遺跡遺物観察表

写真図版

発掘調査報告書抄録

奥付

## 挿 図 目 次

### 下小塙屋敷裏遺跡

第1図	下小塙屋敷裏遺跡と周辺の遺跡	2
第2図	調査区範囲	4
第3図	全体図(北部分)	5
第4図	全体図(南部分)	6
第5図	基本土層	6
第6図	1号住居跡	7
第7図	1号住居跡出土遺物	7
第8図	2号住居跡	8
第9図	3号住居跡	8
第10図	3号住居跡出土遺物	8
第11図	4号・5号住居跡	9
第12図	4号住居跡出土遺物	9
第13図	5号住居跡出土遺物	9
第14図	6号住居跡	10
第15図	6号住居跡出土遺物	10
第16図	7号住居跡	11
第17図	7号住居跡出土遺物	11
第18図	8号住居跡	11
第19図	9号住居跡	12
第20図	10号住居跡	12
第21図	10号住居跡出土遺物	12
第22図	11号住居跡	13
第23図	12号住居跡	13
第24図	12号住居跡出土遺物	14
第25図	13号住居跡	14
第26図	13号住居跡出土遺物	14
第27図	14号住居跡	15
第28図	14号住居跡出土遺物	15
第29図	15号住居跡	15
第30図	16号住居跡	16
第31図	16号住居跡出土遺物	16
第32図	17号・18号住居跡	17
第33図	17号住居跡出土遺物(1)	17
第34図	17号住居跡出土遺物(2)	18
第35図	19号住居跡	20
第36図	19号住居跡出土遺物(1)	20
第37図	19号住居跡出土遺物(2)	21
第38図	20号住居跡	22
第39図	20号住居跡出土遺物	22
第40図	21号住居跡	23
第41図	21号住居跡出土遺物	23
第42図	1号溝	24
第43図	2号溝	24
第44図	3号溝	25
第45図	3号溝出土遺物	25
第46図	4号溝	26
第47図	1号～4号土坑	27
第48図	5号～7号土坑・ピット1・2	28

### 多比良壱ヶ家遺跡

第1図	周辺道路分布図	32
第2図	基本土層図	34
第3図	遺跡位置図	35
第4図	遺跡全体図	36
第5図	S11・S12遺構図	38
第6図	S13～S15(1)遺構図	39
第7図	S15(2)遺構図	40
第8図	S16遺構図	42
第9図	S17遺構図	44
第10図	S1K1～SK8遺構図	44
第11図	SK9～SK11遺構図	45
第12図	SP1～SP7遺構図	45
第13図	SP8～SP11遺構図	46
第14図	SN1・SN2遺構図	46
第15図	SD1～SD3遺構図	47
第16図	SX1遺構図	48
第17図	S11～S15出土遺物図	49
第18図	S15出土遺物図	50
第19図	S16・S17・SD1・SD2出土遺物図	51
第20図	SX1出土遺物図(1)	52
第21図	SX1出土遺物図(2)	53
第22図	遺構外出土遺物図	54
第23図	暦年較正結果	56

## 表 目 次

### 下小塙屋敷裏遺跡

第1表	1号住居跡出土遺物観察表	7
第2表	3号住居跡出土遺物観察表	8
第3表	4号住居跡出土遺物観察表	9
第4表	5号住居跡出土遺物観察表	9
第5表	6号住居跡出土遺物観察表	10
第6表	7号住居跡出土遺物観察表	11
第7表	10号住居跡出土遺物観察表	13
第8表	12号住居跡出土遺物観察表	14
第9表	13号住居跡出土遺物観察表	14
第10表	14号住居跡出土遺物観察表	15
第11表	16号住居跡出土遺物観察表	16
第12表	17号住居跡出土遺物観察表	19
第13表	19号住居跡出土遺物観察表	21
第14表	20号住居跡出土遺物観察表	23
第15表	21号住居跡出土遺物観察表	23
第16表	3号溝出土遺物観察表	25
多比良壱ヶ家遺跡		
第1表	周辺道路一覧	33
第2表	SK(土坑)一覧	43
第3表	SP(柱穴)一覧	43
第4表	測定試料および処理	55
第5表	放射性炭素年代測定および曆年較正の結果	55
第6表	遺物観察表	59

しも こ ばな や しき うら い せき  
**下 小 塙 屋 敷 裏 遺 跡**

## 第1章 調査に至る経緯

平成31年1月、高崎市農政部田園整備課（以下「田園整備課」）より高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課（以下「文化財保護課」）に小規模田園整備事業にあたり遺跡の有無を確認するための試掘調査の依頼があった。

当該地は周知の埋蔵文化財包藏地に該当するため平成31年4月4日試掘調査を実施した。この結果堅穴建物跡等古代の遺構の存在が明らかとなり、田園整備課と文化財保護課で遺跡保存の方策を協議したが、事業計画の変更は困難であるとのことから記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は令和2年1月6日から実施した。

## 第2章 遺跡の位置と周囲の歴史的環境

本遺跡が立地するのはおよそ21,000年前に浅間山起源の泥流によって形成された前橋台地と、約17,000年前の榛名山の火山活動を起源として形成された相馬ヶ原扇状地との境界付近、緩やかに南東に傾斜する平坦地である。

調査地の西は現在埋め立てられて平坦地になっているが、かつては南北方向の谷が入っていた。南側は調査区南端から100m程で天神川によって開析された低地が東西に連なっている。集落遺跡は段丘の南辺に沿って、現在の集落に重なるように展開していたものと予想される（第1図2）。今回の調査区はその北西端付近に当たるものと考えられる。また、同じく天神川の左岸ではあるが、川の蛇行により北西—南東方向に向きを変えた段丘上にも弥生時代から近世にかけての集落遺跡（第1図5）が認められる。

南には天神川の対岸に弥生時代から近世の集落遺跡（第1図3）が確認されており、北には上小塙町から南新波町にかけて広い範囲で古墳時代から近世にかけての集落遺跡（第1図4）が認められる。

下図の範囲には含まれていないが、調査区の北北東800m程の所には高崎市指定史跡上小塙稲荷山古墳が所在し、その北側には北東—南西方向に東山道が推定されている。



1 下小塙屋敷裏遺跡 2~5 周辺の主な集落遺跡

第1図 下小塙屋敷裏遺跡と周辺の遺跡

### 第3章 調査の方法と遺跡の概要

調査対象となったのは現況で農地への出入りのための幅約2mの通路となっていた場所である。これを5.3mに拡幅し道路を敷設する事業に先立って発掘調査が実施されることになった。

このような工事の場合、本来道路敷設工事により破壊される恐れのある場所についてはすべて調査を行うべきであるが、対象地の東寄りを南北に縱断する水路があり、田園整備課より次期の耕作のためこの水路は残してほしいとの申し出があった。調査時期変更などの方法で全面調査が実施できないかを協議したが、工事期日等の問題で水路は残さざるを得なかった。このため水路の崩落を防ぐための後退部分もあり、実際に調査を行えたのは幅約3mの範囲であった。

表土掘削は重機によりを行い、廃土については隣接する農地を借り上げて置き場とした。また、廃土の運搬にはクローラーダンプを使用した。

重機による掘削のち人力によって遺構確認作業を行った。この結果検出された遺構は堅穴住居跡21軒、溝4条、土坑7基、ピット2基であった。

表土掘削は重機の搬出も考慮して南端から行ったのであるが、この調査区南端から6m程の範囲に堅穴住居跡が密集しており、しかも最初に基盤層を確認するためある程度の深さまで一気に掘り進めたため1号住居跡については壁および床面の確認が困難になってしまった。また、この場所で重複する住居跡の数は7軒以上と考えられるのだが、後に慎重に断面観察を行ったものの床面、立ち上がり等検出することができなかった。

このような経緯のため、1、2、12号住居跡についてはカマドのみで住居跡と判断した。また、13号住居跡については他の住居跡によって削られておりカマドと推測される塗みおよび焼土の存在によって住居跡と判断した。

調査区南端から3号住居跡までは1号住居跡を除けば低い位置で床面が検出されたが、6号住居跡より北では住居跡の標高が高くなる。

自然流路の可能性もある4号溝の北では若干の遺構が認められない範囲があるが、1号溝より北で住居跡をはじめとする遺構が確認できた。

調査区南端部の住居跡については1号住居跡が最も後出のものであると考えられるが、それ以外については前述したとおり切り合い関係等の把握は困難である。

16～20号住居については調査時の所見では16号が最も後出のものであり、19号を20号が切り、17号を18号が切り、18号、20号を16号が切るという先後関係が認められた。

北部の7号から11号住居跡は、遺物が少なかったことと覆土と基盤土の色調が近似していたことにより上層での平面確認が困難であった。このため通常より深く掘削してプラン確認を行った。しかし、このことにより7、10号住居跡のように形態を明瞭に把握できないものが生じてしまった。

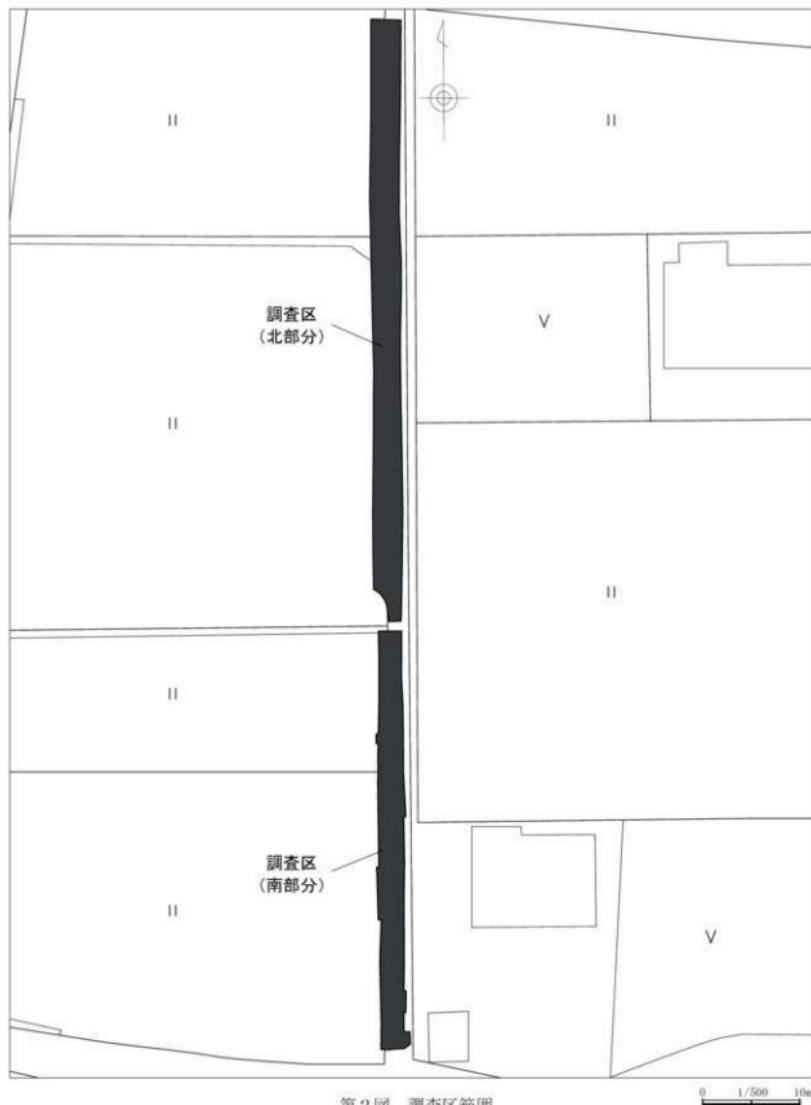
1号溝、4号溝は下部に砂層、砂礫層が認められ水流があったと判断できる。4号溝については幅が10m以上もあり、自然流路であった可能性もある。4号溝については崩落の危険があつたため溝底の検出作業は実施していない。

2号溝については掘り込み面がAs-B純層の直下であった。3号溝は溝として扱っているがこれは硬面が確認できなかつたこと、壁のラインが直線的ではなかつたこと、覆土が砂質であったことなどにより判断したのであるが、遺物の出土、掘り込みの形状などから考えると住居跡であった可能性も否定できない。

土坑、ピットについては遺物の出土もなく時期の認定はできないが、1号土坑に関しては断面よりAs-B層以下以前のものであることが確認できた。

## 第4章 遺構と遺物

### 調査区範囲



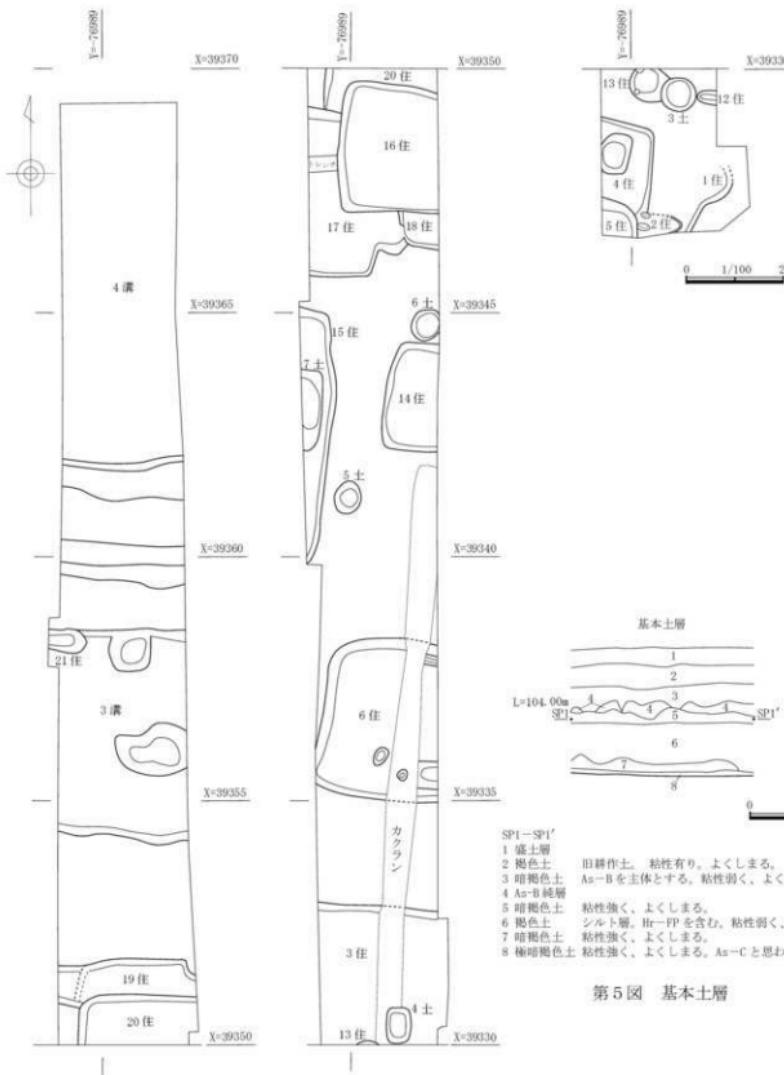
第2図 調査区範囲

全体図（北部分）



第3図 全体図（北部分）

全体図（南部分）



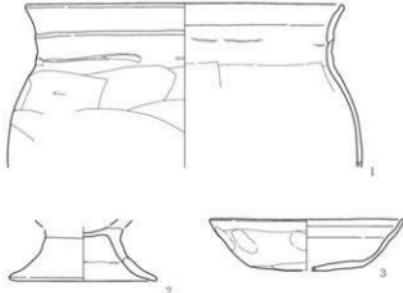
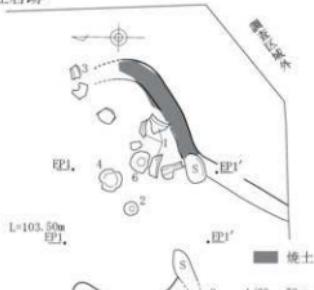
第4図 全体図（南部分）

第5図 基本土層

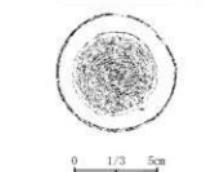
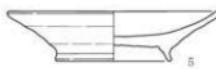
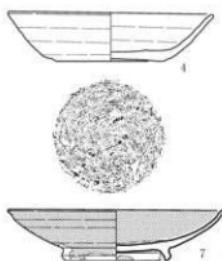
- SP1—SP1'
- 1 砂土層
  - 2 暗褐色土
  - 3 單暗褐色土
  - 4 As-B純層
  - 5 單暗褐色土
  - 6 暗褐色土
  - 7 單暗褐色土
  - 8 極暗褐色土
- 旧耕作土。粘性有り。よくしまる。  
As-Bを主体とする。粘性弱く、よくしまる。  
粘性強く、シルト層。Hr-FPを含む。粘性弱く、よくしまる。  
粘性強く、よくしまる。  
As-Cと思われる軽石粒を含む。

## 竪穴住居跡

## 1号住居跡



第6図 1号住居跡

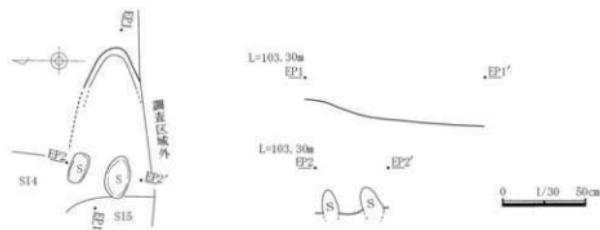


第7図 1号住居跡出土物遺物

第1表 1号住居跡出土遺物観察表

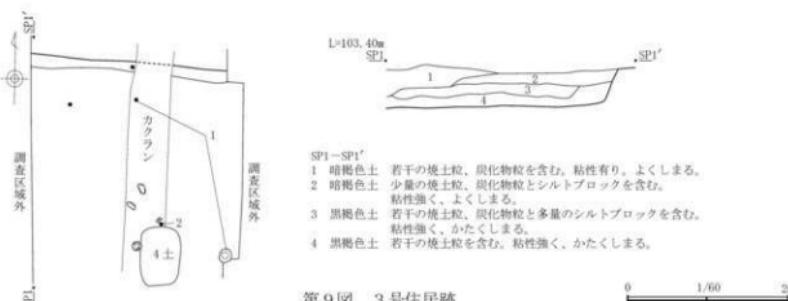
図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（輪葉） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第7図-1 PL5-1	土師器	甕	口縁部～胸部上位 1/2	①石英、白色粒、黒色鉱物 粒、褐色粒 ②内外：にぶい橙色	19.6) [10.1] —	外：口縁部ヨコナデ、胴 部上位ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、胴 部上位ヘラナデ	胴部内面は摩耗
第7図-2 PL5-2	土師器	台付甕	台部完形	①石英、角閃石、白色粒 ②内外：にぶい赤褐色	— [3.3] 9.1	外：台面ヨコナデ 内：台面ヨコナデ	
第7図-3 PL5-3	土師器	甕	口縁部～ 底部1/2	①石英、角閃石、白色粒 ②内外：にぶい橙色	(12.0) 3.2 (6.9)	外：口縁部ヨコナデ、体 部ナデ・指痕圧痕、 底部ヘラケズリ 内：口縁部～体部ヨコナ デ、底部ヘラナデ	
第7図-4 PL5-4	須恵器	甕	口縁部～ 底部3/4	①白色粒 ②内外：黄灰色	12.7 3.1 6.8	クロコ成形、底部右回転 糸切り	還元焰焼成
第7図-5 PL5-5	須恵器	高台付皿	口縁部～ 高台部 2/3	①チャート、白色粒 ②内外：灰色	(13.1) 3.1 (7.1)	クロコ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナデ	還元焰焼成、 内底面平滑
第7図-6 PL5-6	須恵器	高台付皿	口縁部～ 高台部 3/4	①白色粒、黒色鉱物粒 ②外：浅黃橙色 内：にぶい橙色	13.5 2.4 7.4	クロコ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナデ	還元不良
第7図-7 PL5-7	灰釉陶器	皿	口縁部～ 高台部 2/3	①緻密 ②素地：灰黄色 輪葉：灰オリーブ色	(13.4) 3.2 6.7	クロコ成形、底部回転ヘ ラケズリ、高台貼付時に 周縁回転ナデ、灰釉刷毛 塗り	

## 2号住居跡

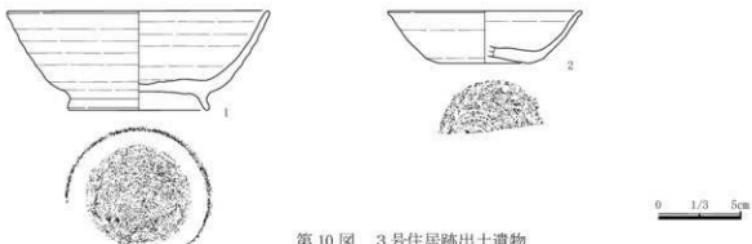


第8図 2号住居跡

## 3号住居跡



第9図 3号住居跡

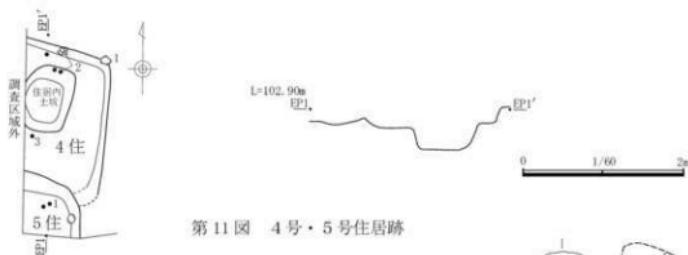


第10図 3号住居跡出土遺物

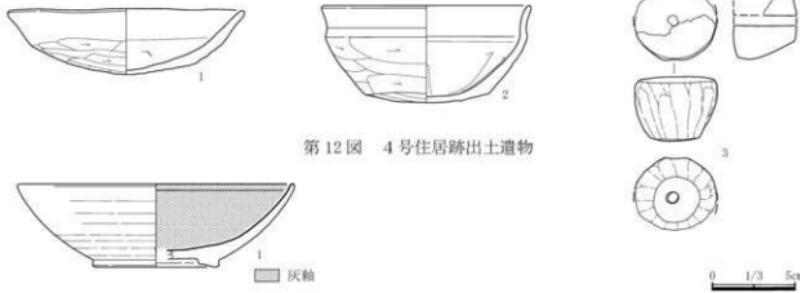
第2表 3号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①給土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第10図-1 PL5-8	須恵器	塊	口縁部～ 高台部2/3	①白色粒 ②内外：灰白色	16.2 6.1 8.7	ロクロ成形、底部回転条 切り、高台貼付時に周縁 回転ナギ	還元焰焼成、 内底面平滑
第10図-2 PL5-9	須恵器	坏	口縁部～ 底部1/2	①白色粒 ②内外：灰色	(12.0) 3.2 (5.5)	ロクロ成形、底部回転条 切り	還元焰焼成

4号・5号住居跡



第11図 4号・5号住居跡



第12図 4号住居跡出土遺物



第13図 5号住居跡出土遺物

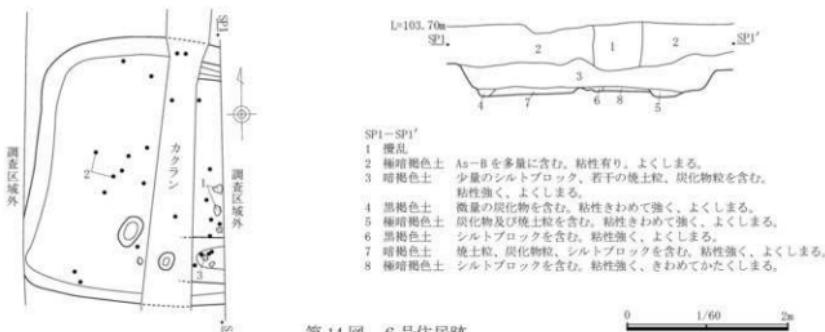
第3表 4号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第12図-1 PL5-10	土師器	壺	口縁部～ 底部2/3	①石英、チャート、白色 粒、黒色鉱物粒 ②外：にぶい褐色 内：黒褐色	(14.6) 4.1 —	外：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラナデ	甕に使用するような 胎土で、夾雜物多い
第12図-2 PL5-11	土師器	壺	口縁部～ 底部2/3	①石英、チャート、白色 粒、黒色鉱物粒 ②内外：にぶい橙色	12.9 6.0 7.5	外：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラナデ	甕に使用するような 胎土で、夾雜物多い
第12図-3 PL5-12	土製品	筋轆車	2/3	①石英、チャート、角閃 石、白色粒 ②にぶい橙色	5.1(上径) 2.9(下径) 4.0(最厚)	上面：ナデ 下面：ナデ 側面：ヘラナデ	孔径0.8、 重さ73.814 g

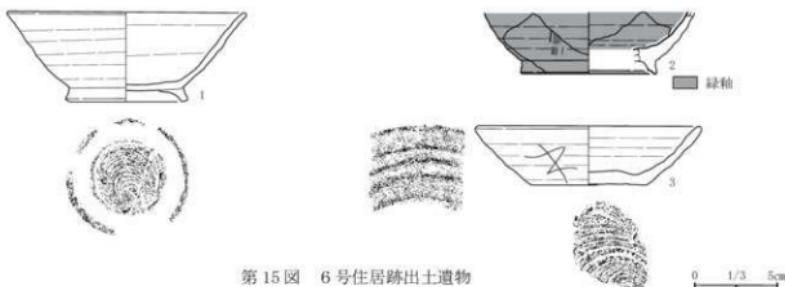
第4表 5号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第13図-1 PL5-13	灰釉陶器	壺	口縁部～ 高台部 1/4	①緻密 ②素地：灰白色 釉薬：灰オリーブ色	(17.0) 5.1 (7.8)	ロクロ成形、底部回転～ ヘラケズリ、高台貼付時に 周縁回転ナデ、灰釉は内 面のみ刷毛塗り	

## 6号住居跡



第14図 6号住居跡



第15図 6号住居跡出土遺物

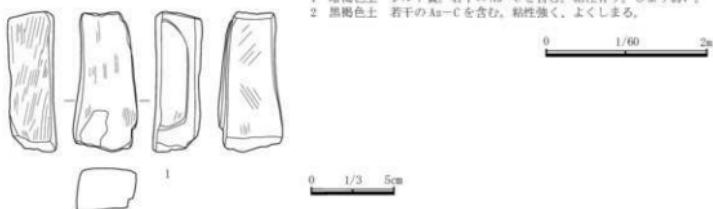
第5表 6号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①給土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第15図-1 Pl.5-14	須恵器	塊	口縁部～ 高台部 2/3	①石英、白色粒 ②内外：灰白色	14.7 5.6 7.5	ロクロ成形、底部回転条 切り、高台貼付時に周縁 回転ナダ	還元焰焼成
第15図-2 Pl.5-15	縁軸陶器	塊	体部～高 台部1/5	①緻密 ②素地：灰黄褐色 釉薬：オリーブ灰色	— [3.7] (8.3)	ロクロ成形、外面体部に 縱方向の櫛描文、内外面 に施釉	高台端部に内傾面を もつ
第15図-3 Pl.5-16	須恵器	塊	口縁部～ 底部1/4	①石英、白色粒、黒色鉱 物粒 ②内外：灰白色	(14.0) 3.7 (7.2)	ロクロ成形、底部右回転 条切り	還元焰焼成、 体外部に刻書

7号住居跡



第16図 7号住居跡

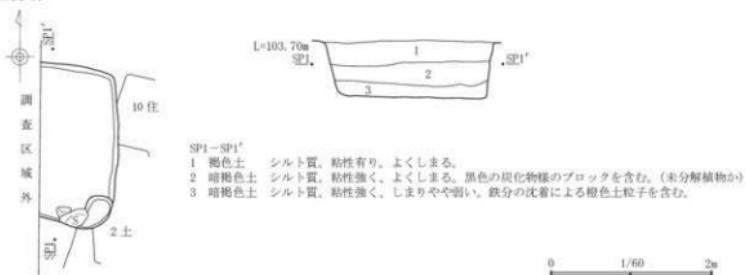


第17図 7号住居跡出土遺物

第6表 7号住居跡出土土遺物観察表

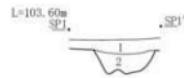
図番号 写真図版	種類	器種	部位	①始土 ②色調（輪架） ③文様等	長さ 最大幅 最大厚 (cm)	整形・調整等	備考
第17図-1 Pl.5-17	石製品	砥石	ほぼ完形	①- ②- ③-	8.6 4.0 2.9	4面を砥面として使用。 左側面が最も平滑	安山岩製、 重さ134.20g

8号住居跡



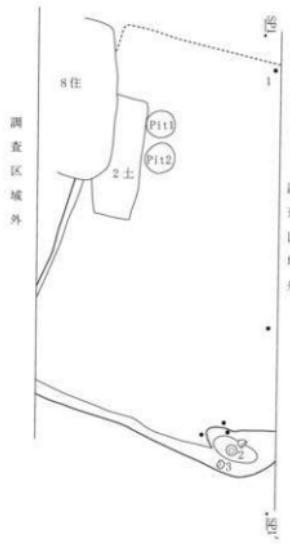
第18図 8号住居跡

9号住居跡



SPI-SPI'  
1 暗褐色土 シルト質。若干のAs-Cを含む。粘性有り。しまり弱い。  
2 黒褐色土 若干のAs-Cを含む。粘性強く。よくしまる。

10号住居跡



第19図 9号住居跡

0 1/60 2m



SPI-SPI'  
1 褐色土 As-Bを多量に含む。粘性有り。よくしまる。  
2 極暗褐色土 As-Bを主体とする。よくしまる。  
3 暗褐色土 砂質。褐色粘質土ブロックを含む。しまり弱い。  
4 As-B純層  
5 褐色土 シルト質。粘性有り。しまりやや弱い。  
6 暗褐色土 黒色土ブロックを含む。粘性有り。よくしまる。  
7 黒色土 灰を多量に含む。しまり弱い。

第20図 10号住居跡

0 1/60 2m



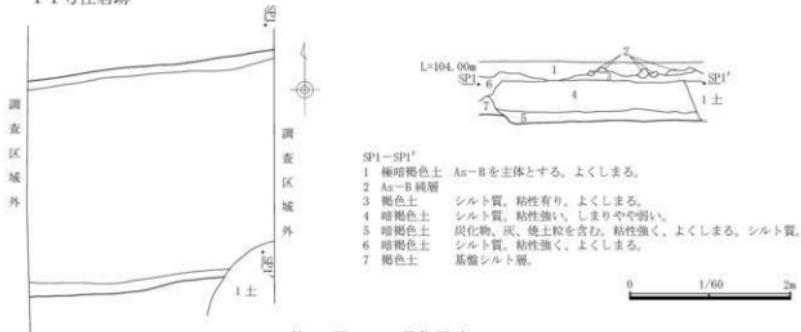
第21図 10号住居跡出土遺物

0 1/3 5cm

第7表 10号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形、調整等	備考
第21図-1 PL5-18	須恵器	小形壺	口縁部～ 高台部 3/4	①石英、角閃石、 チャート、白色粒 ②内外：褐色	8.2 3.5 5.6	ロクロ成形、高台貼付時に底部・周縁回転ナデ	酸化焰焼成、内面は摩耗
第21図-2 PL5-19	須恵器	壺	口縁部 1/2、体部～高台部完形	①石英、黒色鉱物粒 ②外：にぶい黄褐色 内：黒色	14.9 6.6 8.2	ロクロ成形、高台貼付時に底部・周縁回転ナデ 外：体部下位に手持ちヘラケズリ 内：底面一方向のミガキ 体部から口縁部に向けて横方向のミガキ、 黒色処理	黒色土器
第21図-3 PL5-20	須恵器	皿	口縁部～ 底部4/5	①石英、黒色鉱物粒、 褐色粒 ②内外：浅黄褐色	9.7 2.9 5.5	ロクロ成形、底部静止糸切り	還元不良、 器形は歪む

1 1号住居跡



第22図 1 1号住居跡

1 2号住居跡



第23図 1 2号住居跡

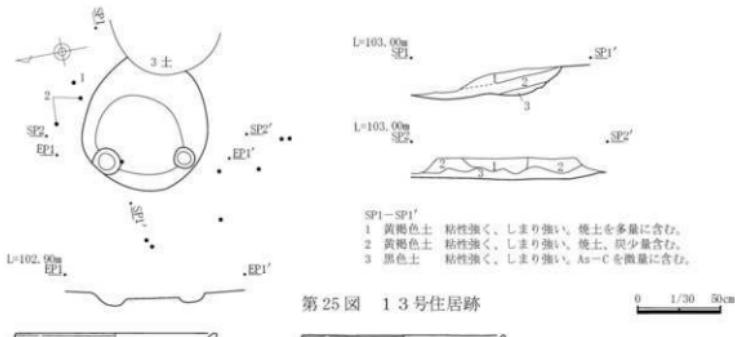


第24図 12号住居跡出土遺物

第8表 12号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第24図-1 PL6-1	土師器	壺	口縁部～ 底部1/2	①白色粒、黒色鉱物粒 ②内外：にぶい褐色	(11.5) 3.6 (7.8)	外：口縁部ヨコナデ、体 部ナデ、指頭圧痕、 底部ヘラケズリ 内：口縁部～体部ヨコナ デ、指頭圧痕、底部 ナデ	
第24図-2 PL6-2	土師器	壺	口縁部 2/3、体 部～底部 完形	①石英、チャート、黒色 鉱物粒、白色粒 ②内外：灰黄褐色	9.4 5.7 4.6	外：口縁部ヨコナデ、体 部ヘラナデ、底部 ナデ 内：口縁部～体部ヨコナ デ、底部ヘラナデ	

13号住居跡



第25図 13号住居跡

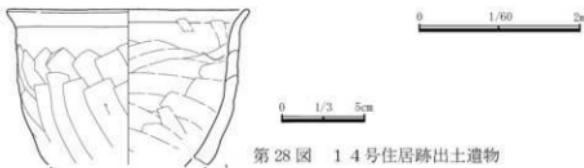
第9表 13号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第26図-1 PL6-3	土師器	壺	口縁部～ 底部3/4	①石英、角閃石、 チャート、白色粒 ②内外：にぶい褐色	12.5 5.5 —	外：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラナデ	甕に使用するような 胎土で、夾雜物多い
第26図-2 PL6-4	土師器	壺	口縁部～ 底部1/2	①石英、角閃石、 チャート、白色粒 ②内外：にぶい黄褐色	(12.6) 4.5 —	外：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラケズリ 内：口縁部～体部ヨコナ デ、底部ヘラナデ	甕に使用するような 胎土で、夾雜物多い

## 1 4号住居跡



第27図 1 4号住居跡

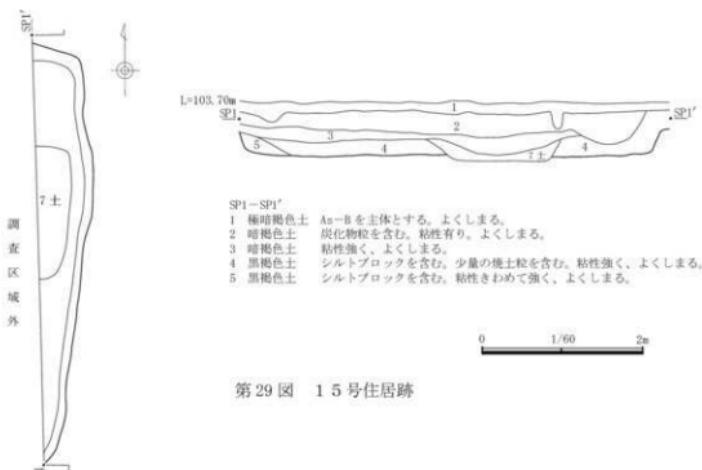


第28図 1 4号住居跡出土遺物

第10表 1 4号住居跡出土遺物観察表

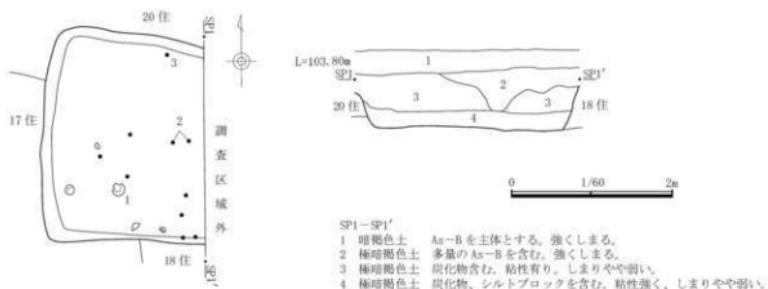
図番号 写真図版	種類	器種	部位	①始土 ②色調(釉薬) ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第28図-1 PL6-5	土師器	小形甕	口縁部～ 胸脚1/4	①石英、白色粒、黒色粒 物粒 ②内外：褐灰色	(14.9) [9.6] —	外：口縁部ヨコナデ、胸 部ヘラケグリ 内：口縁部ヨコナデ、胸 部ヘラナデ	

## 1 5号住居跡



第29図 1 5号住居跡

## 16号住居跡



第30図 16号住居跡

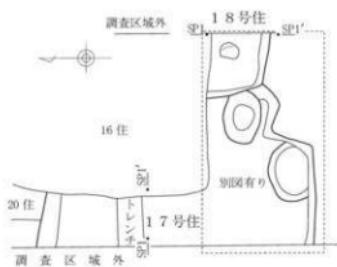


第31図 16号住居跡出土遺物

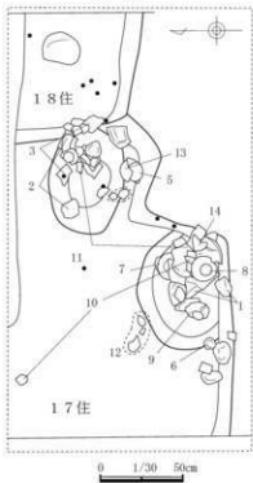
第11表 16号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①粘土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第31図-1 PL6-6	須恵器	塊	口縁部～ 高台部 3/4	①石英、片岩、白色粒 ②内外：にぶい黄褐色	14.1 5.1 7.4	ロクロ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナダ	酸化焰焼成、 内面摩耗
第31図-2 PL6-7	須恵器	高台付皿	口縁部～ 高台部 1/2	①白色粒 ②内外：黄灰色	(13.9) 3.0 8.4	ロクロ成形、底面回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナダ	還元焰燒成、 内底面は平滑
第31図-3 PL6-8	須恵器	皿	口縁部～ 底部2/3	①石英、角閃石、褐色粒 ②内外：灰白色	10.1 2.4 6.4	ロクロ成形、底部静止糸 切り	還元不良、 外外面摩耗

17号・18号住居跡



第四圖



第32図 17号・18号住居跡

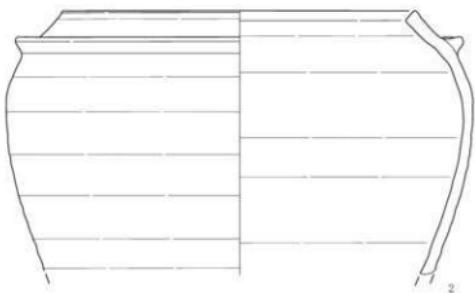
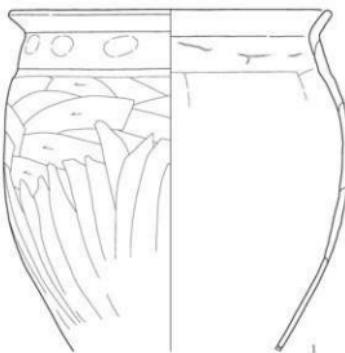
17号住  
L=103.70m  
SEI. 1 SEI'  
16住

SPI-SPI<sup>1</sup>  
1 喀褐色土 若干の炭化物を含む。粘性有り。よくしまる。  
2 暗褐色風化土 炭化物、カルシウムカルカノ、粘性強め。まれに砂利。

18号住  
L=103.80m  
SPL. 1 2 SPL'  
3 4

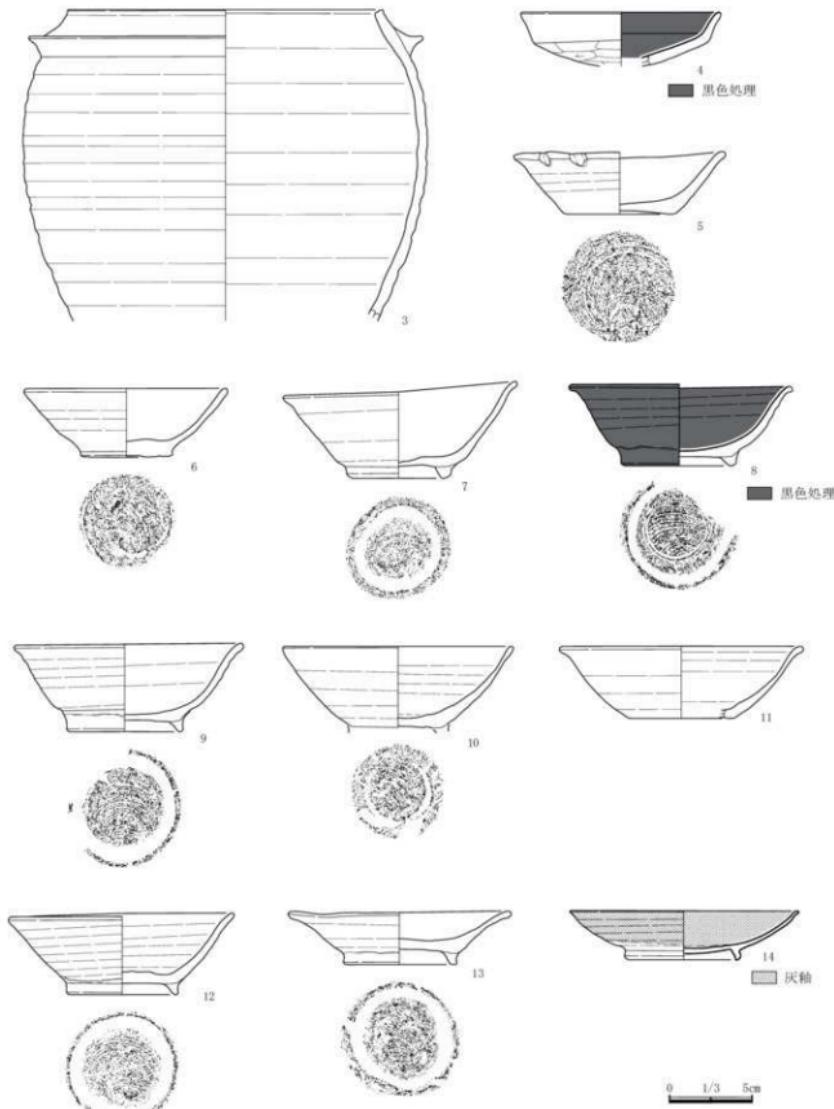
SP1-SP1'	
1 喙褐色土	As-Bを主体とする。強くしまる。
2 楊柳褐色土	多量のAs-Bを含む。強くしまる。
3 喙褐色土	若干の炭化物を含む。粘性有り。よくしまる。
4 楊柳褐色土	炭化物、燒土粒を含む。粘性強く、よくしまる。

$$0 \qquad \qquad \frac{1}{60} \qquad \qquad 2x$$



第33図 17号住居跡出土遺物(1)

0 1/3 5cm

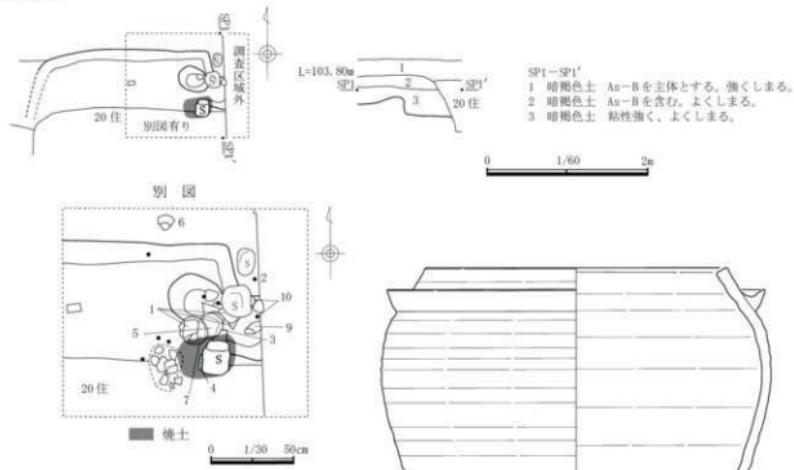


第34図 17号住居跡出土遺物(2)

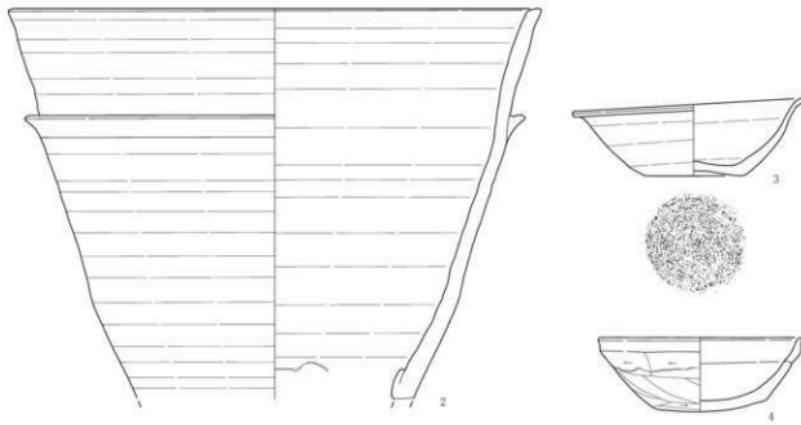
第12表 17号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（輪裏） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第33図-1 PL6-9	土師器	甕	口縁部～ 胴部3/4	①石英、角閃石、白色粒 ②内外：明赤褐色	19.9 [21.0] —	外：口縁部ヨコナデ・指 頭圧痕、胴部ヘラケ ズリ 内：口縁部ヨコナデ、胴 部ヘラナデ	内面胴部は摩耗
第33図-2 PL6-10	須恵器	羽釜	口縁部～ 胴部1/3	①石英、黒色鉱物粒 ②外：灰白色 内：橙色	(21.6) [16.1] —	ロクロ成形、跨貼付	還元不良
第34図-3 PL6-11	須恵器	羽釜	口縁部～ 胴部1/3	①石英、黒色鉱物粒 ②外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	(19.5) [19.1] —	ロクロ成形、跨貼付	還元やや不良
第34図-4 PL6-12	土師器	壺	口縁部～ 体部2/3	①石英・チャート・ 白色粒 ②外：灰黃褐色 内：褐灰色	(12.2) [3.3] —	外：口縁部ヨコナデ、体 部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、体 部ヘラナデ、黒色 処理	内面は器表面剥離
第34図-5 PL6-13	須恵器	壺	完形	①白色粒 ②内外：灰色	13.0 3.9 6.8	ロクロ成形、底部右回転 糸切り	還元焰焼成、口唇部 に棒状工具による押 压痕2ヵ所あり
第34図-6 PL7-1	須恵器	壺	口縁部～ 底部2/3	①石英・角閃石・白色粒 ②内外：橙色	(12.6) 4.3 5.8	ロクロ成形、底部回転糸 切り	酸化焰焼成、 内外面ともに摩耗
第34図-7 PL7-2	須恵器	壺	ほぼ完形	①石英・黒色鉱物粒・白 色粒 ②内外：にぶい黄褐色	14.4 6.0 6.5	ロクロ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナデ	酸化焰焼成、 内外面ともに摩耗
第34図-8 PL7-3	須恵器	壺	口縁部～ 高台部 4/5	①雲母・白色粒 ②内外：黒褐色	18.8 5.0 7.1	ロクロ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナデ、内外面に黒色 処理	還元焰焼成
第34図-9 PL7-4	須恵器	壺	高台部 1/3欠損	①石英・白色粒 ②内外：にぶい黄褐色	14.1 5.4 7.2	ロクロ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナデ	還元不良
第34図-10 PL7-5	須恵器	壺	口縁部～ 底部4/5	①白色粒 ②内外：灰黄色	14.2 [5.1] —	ロクロ成形、底部回転糸 切り	還元焰焼成
第34図-11 PL7-6	須恵器	壺	口縁部～ 底部1/2	①石英・黒色鉱物粒 ②内外：黄灰色	(15.0) [4.5] (6.6)	ロクロ成形	還元焰焼成
第34図-12 PL7-7	須恵器	壺	口縁部～ 高台部 3/4	①白色粒 ②内外：灰色	13.9 5.0 6.9	ロクロ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナデ	還元焰焼成
第34図-13 PL7-8	須恵器	高台付皿	口縁部～ 高台部 2/3	①雲母・白色粒 ②外：にぶい橙色 内：褐灰色	13.8 3.2 7.0	ロクロ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナデ	還元やや不良
第34図-14 PL7-9	灰釉陶器	皿	ほぼ完形	①織密 ②素地：灰白色 輪裏：灰オリーブ色	14.1 3.1 7.2	ロクロ成形、底部回転ヘ ラケズリ、高台貼付時に 周縁回転ナデ、灰釉刷毛 塗り	

19号住居跡

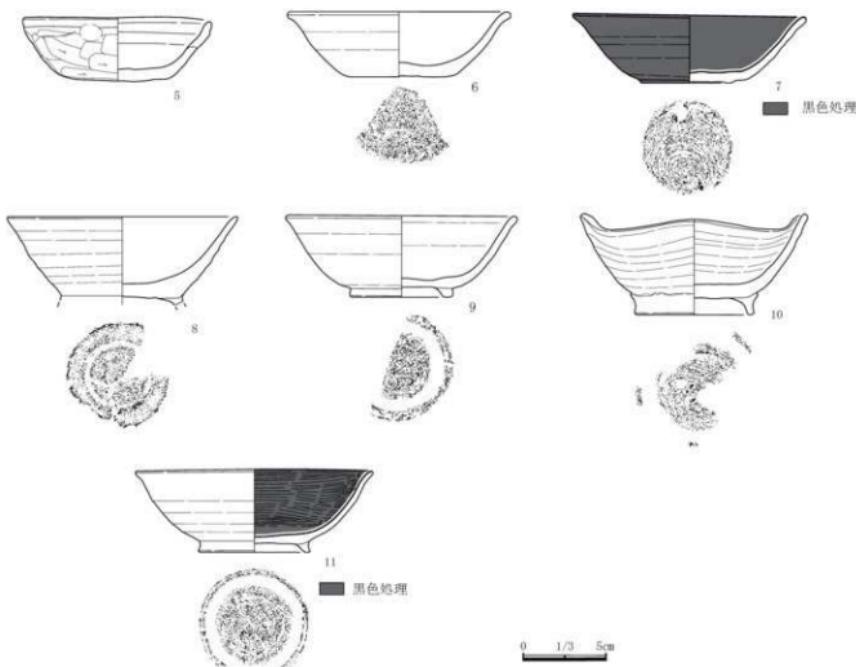


第35図 19号住居跡



第36図 19号住居跡出土遺物 (1)

0 1/3 5cm



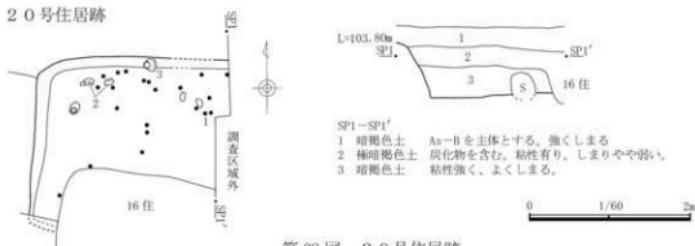
第37図 19号住居跡出土遺物(2)

第13表 19号住居跡出土遺物観察表

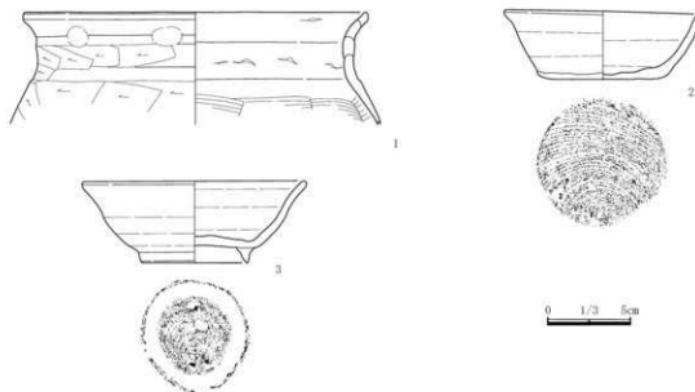
図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調(釉薬) ③文様等	口径 器高底径 (cm)	整形・調整等	備考
第36図-1 PL7-10	須恵器	羽釜	口縁部～ 胸部1/3	①石英・黒色鉱物粒・ 白色粒 ②内外：褐色	(18.7) (21.0) —	クロコ形成、跨貼付	酸化焰焼成
第36図-2 PL7-11	須恵器	瓶	口縁部～ 胸部1/4	①片岩・石英・白色粒 ②内外：灰色	(32.8) (24.0) —	クロコ形成、跨貼付	還元焰焼成
第36図-3 PL7-12	須恵器	壺	ほぼ完形	①片岩・石英・白色粒 ②内外：にぶい黄褐色	14.5 4.8 6.1	クロコ形成、底部右回転 余切り	還元不良
第36図-4 PL7-13	土師器	壺	口縁部～ 底部3/4	①石英・黒色鉱物粒・ 白色粒 ②内外：にぶい赤褐色	12.5 4.6 7.0	外：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラケズリ 内：口縁部～体部ヨコナ デ、底部ヘラナデ	
第37図-5 PL7-14	土師器	壺	ほぼ完形	①石英・黒色鉱物粒・ 白色粒 ②内外：明赤褐色	11.6 4.0 6.5	外：口縁部ヨコナデ、体 部～底部ヘラケズリ 内：口縁部～体部ヨコナ デ、底部ヘラナデ	
第37図-6 PL8-1	須恵器	壺	口縁部～ 底部1/4	①石英・黒色鉱物粒・ 白色粒 ②内外：灰黃褐色	(13.8) 4.0 (7.1)	クロコ形成、底部回転余 切り	酸化焰焼成、 外表面摩耗

第37図-7 PL8-2	須恵器	塊	口縁部～底部3/4	①石英・黒色鉱物粒・白色粒 ②内外：黒褐色	14.4 4.4 5.7	ロクロ成形、底部回転条切り、内外面黒色処理	還元不良
第37図-8 PL8-3	須恵器	塊	口縁部～底部1/3	①黒色鉱物粒・白色粒・褐色粒 ②内外：にぶい橙色	(14.2) [5.4] —	ロクロ成形、底部回転条切り後ナダ、高台貼付時に周縁回転ナダ	酸化焰焼成
第37図-9 PL8-4	須恵器	塊	口縁部～高台部1/5	①石英・黒色鉱物粒 ②内外：にぶい黄橙色	(14.3) 5.1 (6.3)	ロクロ成形、底部回転条切り後ナダ、高台貼付時に周縁回転ナダ	還元やや不良
第37図-10 PL8-5	須恵器	塊	口縁部～高台部1/3	①白色粒 ②内外：にぶい黄橙色	(14.0) 6.2 7.3	ロクロ成形、底部回転条切り、高台貼付時に周縁回転ナダ	還元やや不良
第37図-11 PL8-6	須恵器	塊	口縁部～高台部3/4	①石英・黒色鉱物粒・白色粒 ②内外：にぶい黄橙色 内：黒色	14.6 5.1 6.8	ロクロ成形、底部回転条切り、高台貼付時に周縁回転ナダ 内：口縁部～体部横方向のミガキ、底部へラナダ、黒色処理	黒色土器、酸化焰焼成、内面磨耗、内底面はミガキ剥落か

20号住居跡



第38図 20号住居跡

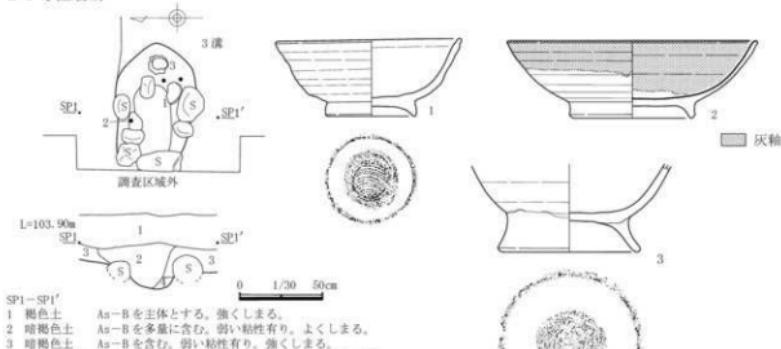


第39図 20号住居跡出土遺物

第14表 20号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第39図-1 PL8-7	土師器	甕	口縁部～ 胴部上位 1/4	①石英・黒色鉱物粒・ 白色粒 ②内外：明赤褐色	(21.3) [7.0] —	外：口縁部ヨコナダ、一 部ヘラケズリ・指頭 圧痕、胴部上位ヘラ ケズリ 内：口縁部ヨコナダ、胴 部上位は木口状工具 によるナダ	
第39図-2 PL8-8	須恵器	壺	ほぼ完形	①白色粒 ②内外：灰色	12.2 4.3 8.0	ロクロ成形、底部回転糸 切り	還元焰焼成
第39図-3 PL8-9	須恵器	壺	口縁部～ 高台部 1/2	①石英・黒色鉱物粒 ②内外：にぶい黄橙色	13.8 5.1 6.6	ロクロ成形、底部回転糸 切り後ナダ、高台貼付時に 周縁回転ナダ	還元不良

21号住居跡



第40図 21号住居跡

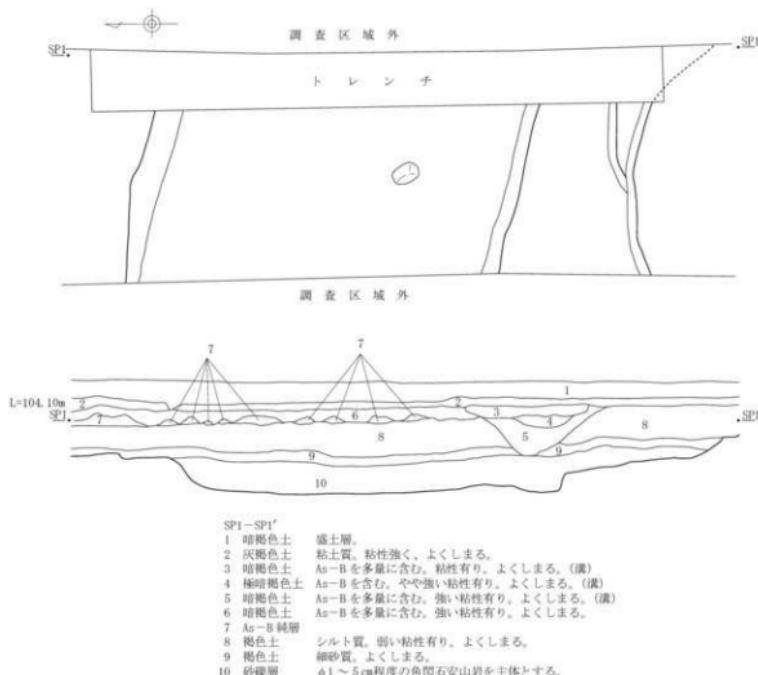
第41図 21号住居跡出土遺物

第15表 21号住居跡出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調（釉薬） ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第41図-1 PL8-10	須恵器	壺	口縁部～ 高台部 2/3	①白色粒・黒色鉱物粒 ②内外：にぶい橙色	11.5 4.8 5.6	ロクロ成形、底部回転糸 切り、高台貼付時に周縁 回転ナダ	酸化焰焼成
第41図-2 PL8-11	灰釉陶器	壺	口縁部～ 高台部 1/4	①緻密 ②素地：灰白色 釉薬：灰白色	(15.5) 4.8 (7.7)	ロクロ成形、底部回転ヘ ラケズリ、高台貼付時に 周縁回転ナダ、外面全体 下半は回転ヘラケズリ、 灰釉没し掛け	
第41図-3 PL8-12	須恵器	壺	体部～高 台部3/4	①石英・チャート・ 黒色鉱物粒 ②にぶい黄橙色	— [5.5] 8.7	ロクロ成形、底部回転糸 切り後ナダ、高台貼付時に 周縁回転ナダ	酸化焰焼成

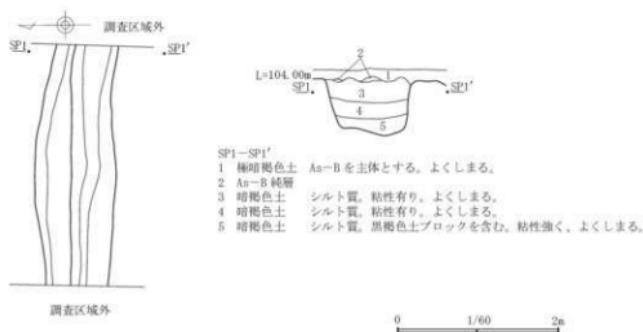
## 溝

## 1号溝



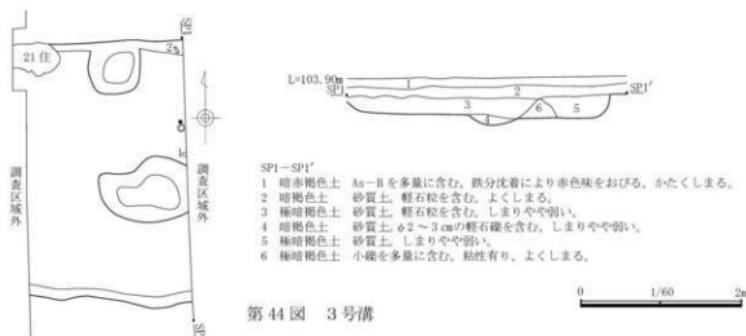
第42図 1号溝

## 2号溝

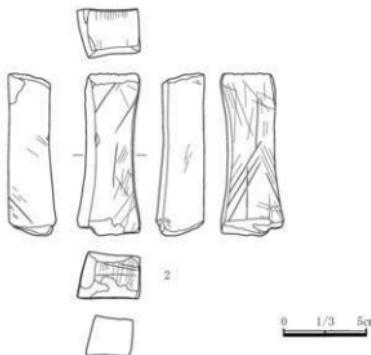
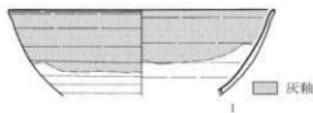


第43図 2号溝

3号溝



第44図 3号溝

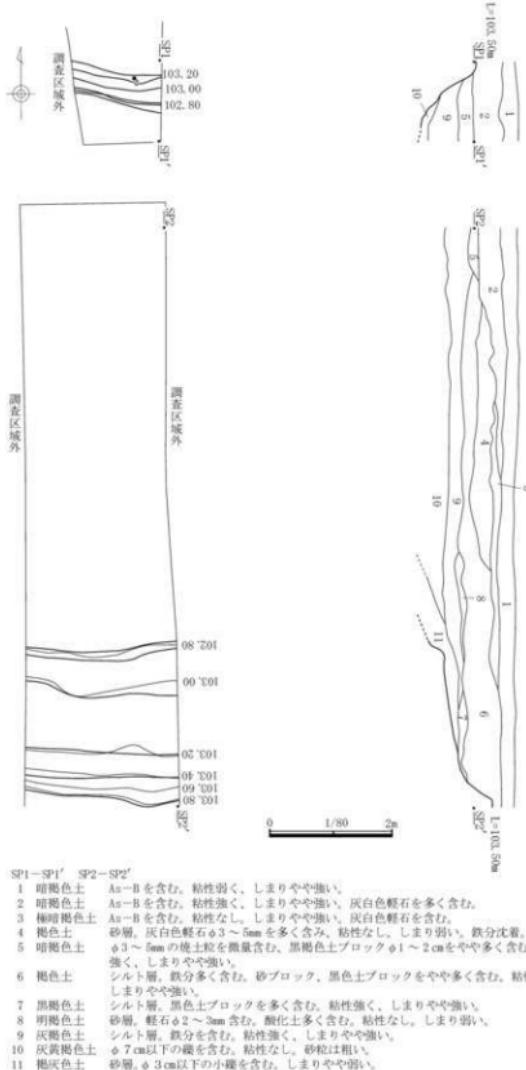


第45図 3号溝出土遺物

第16表 3号溝出土遺物観察表

図番号 写真図版	種類	器種	部位	①胎土 ②色調 (釉薬) ③文様等	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等	備考
第45図-1 PL8-13	灰軸陶器	塊	口縁部～ 体部1/3	①緻密 ②素地：灰色 釉薬：灰白色	(16.4) [5.3] —	クロ成形、外面底部下 半は回転ヘラケズリ、灰 釉浸し掛け	
第45図-2 PL8-14	石製品	砥石	ほぼ完形	①— ②— ③—	10.0(長) 3.9(幅) 2.9(厚)	6面を研面として使用、 右側面が最も平滑	流紋岩製、 重さ 149.32g

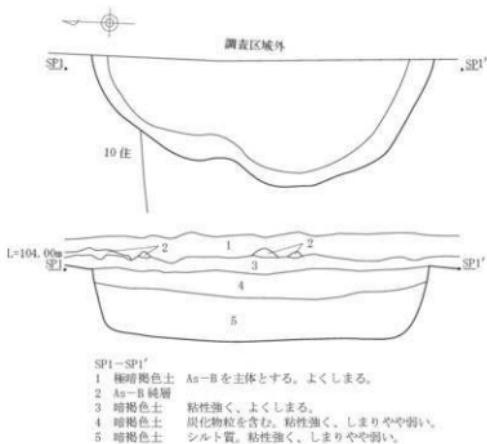
4号溝



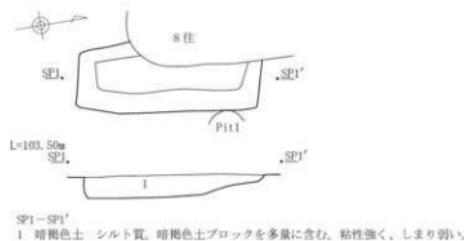
第46図 4号溝

## 土坑・ピット

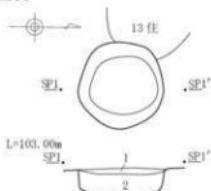
## 1号土坑



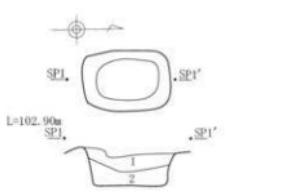
## 2号土坑



## 3号土坑



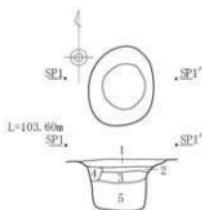
## 4号土坑



第47図 1号～4号土坑

0 1/40 1m

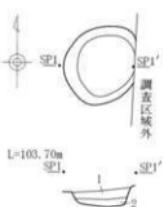
5号土坑



SPI-SPI'

- 1 黒褐色土 若干の焼土粒と炭化物粒を含む。粘性有り。  
かたくしまる。
- 2 暗褐色土 シルト質の小ブロックを含む。粘性強く、  
かたくしまる。
- 3 黒褐色土 微量の炭化物粒を含む。粘性強く、強くしまる。
- 4 暗褐色土 シルト質のブロック。
- 5 黒褐色土 微量の焼土粒と炭化物粒を含む。粘性強く、  
しまりやや弱い。

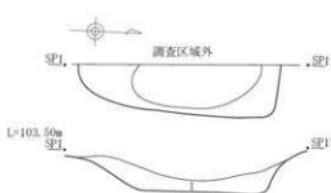
6号土坑



SPI-SPI'

- 1 黒褐色土 粘性有り。微量の炭化物を含む。よくしまる。
- 2 暗褐色土 シルトを多く含む。粘性有り。しまりやや弱い。

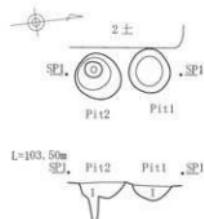
7号土坑



SPI-SPI'

- 1 暗褐色土 粘性強く、よくしまる。

Pit 1・2



Pit 1 SPI-SPI'

- 1 黒色土 極細土ブロック混入やや多い。褐灰色土ブロック混入少い、  
粘性強く、しまり強い。

Pit 2 SPI-SPI'

- 1 黄褐色土 黒色土ブロック混入少い。粘性強く、しまり強い。

第48図 5号～7号土坑・ピット1・2

た い ら ひと つ や い せき  
多 比 良 壱 ツ 家 遺 跡

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成29年8月、高崎市農政部田園整備課より文化財保護課へ、高崎市吉井町多比良壱ツ家地区における農道拡幅事業の計画が説明された。事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地（吉井町遺跡地図No.115）に該当することから、田園整備課より文化財保護課に遺跡確認調査の依頼があった。これを受けて文化財保護課は、周辺に所在する群馬県指定史跡入野遺跡をはじめ、多比良追部野遺跡などを中心とした古墳時代後期の集落が広範囲に分布することから、本事業地においても同様の遺構の検出を想定した。平成31年4月8日、市内遺跡試掘調査（試掘番号R1-4）を実施したところ、当初の予想通り古墳時代から古代に至る集落跡を検出した。この結果を受けて、田園整備課と文化財保護課の間で工事と文化財の遺跡保護の協議が行われたが、工事計画の変更是困難との回答で、本調査を実施する計画が立てられた。その後、文化財保護法第94条に基づく通知が提出され、記録保存のための本調査が実施されるに至った。

### 第2節 調査の経過

以下、調査記録日誌より抜粋した。

12月26日	発掘調査開始。	2月20日	7区-SX 1掘削。全景写真撮影。
	調査区設定。仮設プレハブ設置。	3月10日	4区-SI 6カマド調査。
1月10日	表土掘削開始。1~3区調査。	3月21日	仮設プレハブ等撤去。
1月30日	4区-SI 5掘削。全景写真撮影。	3月25日	借地の農地復旧工事完了。
2月7日	5・6区表土掘削。	3月26日	発掘調査終了。

## 第2章 調査の立地と環境

### 第1節 遺跡の地理的環境

多比良壱ツ家遺跡は、群馬県高崎市吉井町多比良字壱ツ家、字千本原に位置する。地形的には鏡川の右岸上位段丘面に立地し、調査区東側は標高149m、調査区西側は142mを測る。調査区内の比高は約7~8mあり、矢田川へ下る緩やかな傾斜地に立地する。鏡川は下仁田町と長野県境付近にその源を発し、藤岡市上落合付近で鮎川と合流する。甘楽町・高崎市吉井地域に至る広範囲の流域では、特に右岸において上位・下位に分かれる顕著な河岸段丘を形成している。また、この河岸段丘を縦断するように、南方多野山地に源流をもつ小河川（矢田川・大沢川など）が段丘を南北に区切り、いくつもの舌状台地が並ぶ「甘楽の谷」の景観を成している。本遺跡地も、西は矢田川、東は土合川に挟まれた舌状台地上に立地する。

上位段丘の形成は、洪積世末期（約25,000年前）に遡り、関東ローム層が厚く堆積している。下層の基盤は第三紀に形成された泥岩で、その上層に粘土層が堆積する。上層ロームは集落の形成や作物栽培に適した土壤である。それゆえ上位段丘には、旧石器時代から中世城館跡に至る遺構・遺物が非常に高い密度で分布する。

### 第2節 遺跡の歴史的環境

**旧石器時代** 多比良追部野遺跡（12）において、AT下層のナイフ形石器をはじめとする石器群が出土している。矢田遺跡（3）でも台形様石器などが出土している。

**縄文時代** 前期では石神原遺跡（39）で関山II式に神ノ木式、中越式を伴う住居跡が確認されている。その他に多比良天神原遺跡（10）で有尾・黒浜式期の住居跡、神保植松遺跡（9）で諸磧式期を

中心とした住居跡、黒熊遺跡群（15）で諸磯c式期の住居跡が確認されている。中期では矢田遺跡（3）や多比良笠掛遺跡（17）で、住居跡が確認されている。晚期では腰巻遺跡（26）で深鉢に入った状態の磨製石斧7点が出土している。

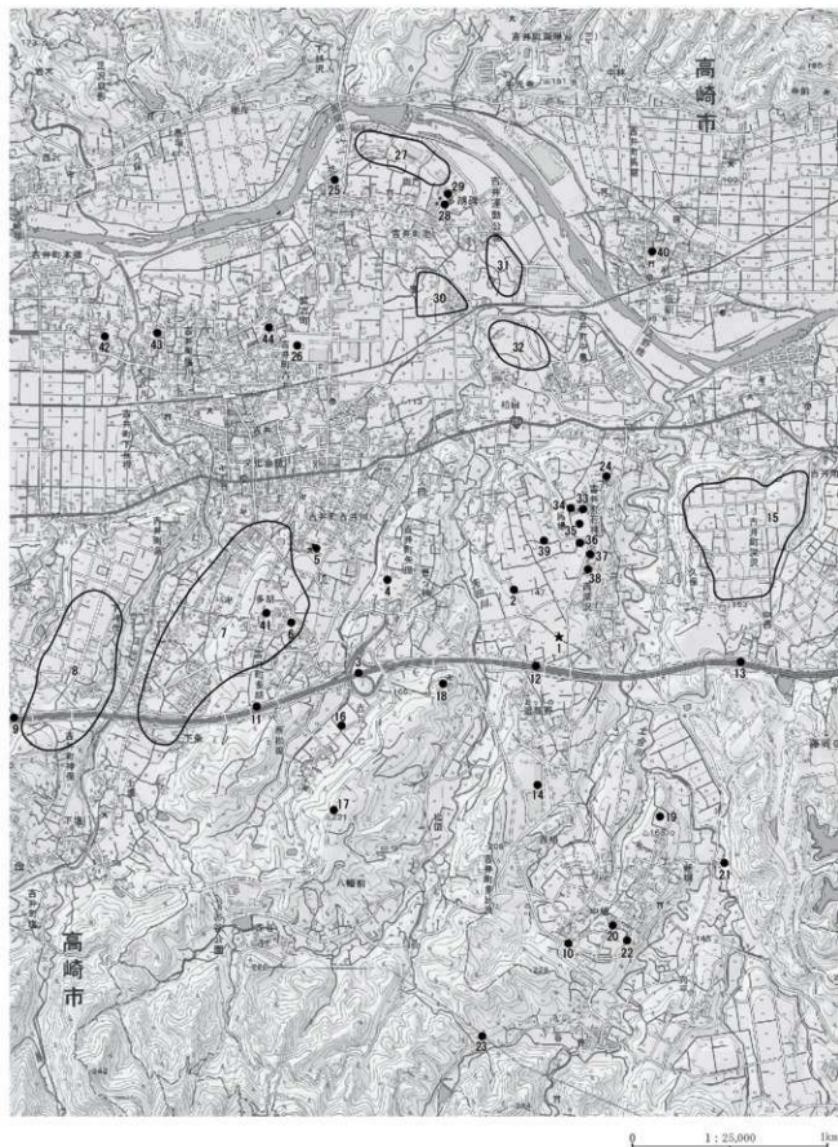
**弥生時代** 神保植松遺跡など中期の遺跡も丘陵上に点在するが、遺跡が増加するのは後期に入つてからである。周辺では入野遺跡（35）、川内遺跡（5）、黒熊遺跡群（15）などがあり、集落とともに方形周溝墓も多く検出している。

**古墳時代** 集落は中期のものは非常に少ないが、後期からの増加はめざましく、鏡川上位段丘および下位の微高地の広範囲に継続的な営みを見せる。川内遺跡、入野遺跡、黒熊遺跡群、矢田遺跡などがある。中でも入野遺跡は昭和48年に群馬県指定史跡として入野中学校の校庭に包蔵する形で保存されているが、周辺は後期集落が広域で分布すると考えられている。古墳については、周辺では入野村42号墳（24）をはじめ「上毛古墳綜覧」によると石神地区に9基の記載がある（『吉井町誌』の名称は祝神古墳群）。終末期では、高崎市指定史跡多比良諷訪前古墳（20）、同指定多胡薬師塚古墳（6）がある。義門は多胡碑の規模や形状に類似した一石立柱状で、多胡薬師塚古墳の側壁は截石切組積の精巧な造りである。

**奈良・平安時代** 和銅4年（711）に多胡郡が建郡されたことを記す、国指定特別史跡「多胡碑」がある（28）。多胡郡を成す郷の一つ矢田郷は、上位段丘に位置する矢田遺跡の調査で「八田郷」の線刻をもつ石製鍾車の出土から、遺跡地が矢田郷として比定されている。その他にも古墳時代後期の集落遺跡と重なるように、椿谷戸遺跡（4）、多比良遺跡（14）、多比良追部野遺跡、黒熊遺跡群、川内遺跡等で広範囲に分布している。また生産遺跡は、牛伏山南麓から東麓にかけて下五反田窯跡（21）、滝の前窯跡（22）、末沢I・II窯跡（23）など、県内最大規模の須恵器・瓦の窯跡群が多く確認されている。上野国分僧寺・国分尼寺の建物に使用された瓦の多くは、吉井窯跡群で生産されたものである。官衙・寺院遺跡は、複弁七弁連華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦を伴う馬庭東遺跡（40）がある。8世紀初頭前後の瓦を伴う建物遺構の所在から、多胡郡衙との関連が注視される。また、多胡郡衙の一角をなす多胡郡正倉跡（30）は、区画溝に囲まれた内部において縦瓦葺大型礎石建物跡を確認している。平安期には寺院跡である黒熊中西遺跡（13）などが確認されている。

**古代末期** 「多胡庄」「神保庄」の莊園が存在していたことが窺われ、源義賢の居城といわれる多胡館跡（41）との関連が注視される。多胡館跡は館外堀の底面にAs-Bテフラが一次堆積に近い状態で検出されており、12世紀前半以前の遺構と推定される。

**中世** 関東管領が平井城に置かれた時期と関連する城館として、新堀城跡（19）、多比良中ノ原城跡、天久沢陣城跡（18）などがある。築造者や城主が分かる城館跡は、「箕輪軍記」にみられる天久沢陣城の武田信玄、「関東幕注文」にみられる小串館の小串氏、神保植松城の神保氏などがある。「箕輪軍記」によると、天久沢陣城跡の東側、本遺跡地に該当する矢田千保原の台地上に延徳寺が所在したが、信玄の兵糧調達を断つことから焼き払われたと伝えられる。



第1図 周辺遺跡分布図（国土地理院1/25,000を使用）

第1表 周辺遺跡一覧

NO	遺跡名	概要	備考
1	多比良巣ヶ家遺跡		本報告
2	藤ノ木遺跡	古墳～平安時代の集落	『藤ノ木遺跡』1999 吉井町教委
3	矢田遺跡	縄文～平安時代の集落・「矢田郷」防護車	『矢田遺跡』1990 群理文
4	椿谷戸遺跡	縄文～平安時代の集落・中世土坑	『椿谷戸遺跡』1989 吉井町教委
5	川内遺跡	弥生～平安時代の集落・方形周溝墓群	『川内遺跡』1982 吉井町教委
6	多胡葉部塚古墳	市指定史跡 終末期の横穴式石室	『吉井町誌』1974 吉井町誌編さん委員会
7	多胡古墳群	後期御集墳	『東シメ木・多胡松原遺跡』2005 吉井町教委
8	神保古墳群	後期群集墳	『吉井町誌』1974 吉井町誌編さん委員会
9	神保植松遺跡	縄文～平安時代の集落・中世城郭・土坑	『神保植松遺跡』1997 群理文
10	多比良天神原遺跡	縄文前中期・古墳	『多比良天神原遺跡』2000 吉井町教委
11	多胡蛇黒遺跡	古墳～平安時代の集落	『多胡蛇黒遺跡』1993 群理文
12	多比良追部野遺跡	AT下層石器群・古墳～平安時代の集落	『多比良追部野遺跡』1997 群理文
13	黒熊中西遺跡	平安時代寺院跡・「元慶四年」銘の砥石	『黒熊中西遺跡(1)(2)』1992・1994 群理文
14	多比良遺跡	縄文～平安時代の集落	『多比良遺跡発掘調査報告書』1992 吉井町教委
15	黒熊遺跡群	縄文～平安時代の集落・土坑・中世井戸	『黒熊遺跡群発掘調査報告書』(1)～(5) 1981～1985 吉井町教委
16	柳田遺跡	古墳～平安時代の集落	『柳田遺跡群発掘調査報告書』1989 吉井町教委
17	多比良笠掛遺跡	縄文～平安時代の集落	『多比良笠掛遺跡調査報告書』2003 吉井町教委
18	天久沢跡城跡	永禄年間の城館跡	『中世吉井の城館跡』1991 吉井町教委
19	新堀城跡	平仮城の別城 永禄年間の城館跡	『新堀城跡』1992 吉井町教委
20	多比良諏訪前古墳	市指定史跡 終末期の横穴式石室	『吉井町誌』1974 吉井町誌編さん委員会
21	下五反田窯跡	平安期 須恵器・瓦登窯跡	『考古学研究室発掘調査報告書』1984 国士館大学
22	淹の前窯跡	平安期 瓦窯跡 文字瓦多数出土	『群馬文化』1989 群馬県地域文化研究協議会
23	末沢窯跡	平安期 須恵器・瓦登窯跡	『考古学研究室発掘調査報告書』1984 国士館大学
24	入野村 42号墳	後期円墳	『上毛古墳総覧』1938 群馬県
25	竹脇遺跡	平安時代の集落	『竹脇遺跡』1990 吉井町教委
26	腰巻遺跡	縄文時代晚期 深鉢に入った磨製石斧7点	『群馬県立博物館紀要』1983 梅沢重昭 飯島義雄
27	下池古墳群	後期群集墳	『吉井町誌』1974 吉井町誌編さん委員会
28	多胡碑	国指定特別史跡 和銅4年(711) 多胡建郡碑	『上野三碑の研究』1980 尾崎喜左雄
29	御門遺跡	古墳・平安時代の集落・土坑	『御門遺跡発掘調査報告書』1994 吉井町教委
30	多胡郡正倉跡	国指定史跡 奈良時代礎石建物跡等	『多胡郡正倉跡』2019 高崎市教委
31	高木古墳群	後期群集墳	『吉井町誌』1974 吉井町誌編さん委員会
32	塙原古墳群	後期群集墳	『吉井町誌』1974 吉井町誌編さん委員会
33	入野遺跡	縄文～古墳時代の集落・中世土坑墓	『入野遺跡』1985 吉井町教委
34	入野遺跡Ⅲ	縄文～古墳時代の集落	『入野遺跡』1986 吉井町教委
35	入野遺跡	古墳時代後期土師器研究の学史的遺跡、県指定史跡	『入野遺跡』1962 尾崎喜左雄
36	入野遺跡群馬場遺跡	弥生～古墳時代の集落・平安期掘立柱建物跡	『入野遺跡群馬場遺跡』1994 吉井町教委
37	入野遺跡群清水遺跡	弥生～奈良時代の集落・掘立柱建築跡・土坑	『入野遺跡群清水遺跡』1995 吉井町教委
38	入野遺跡群山本遺跡	弥生～平安時代の集落・土坑	『入野遺跡群山本遺跡』1993 吉井町教委
39	石神原遺跡	縄文～奈良時代の集落	『石神原遺跡』2017 高崎市教委
40	馬庭東遺跡	多胡建郡頃の瓦葺建物の分布	『吉井町誌』1974 吉井町誌編さん委員会
41	多胡跡	古代末期 濱綾賀居住といわれる館跡	『町内遺跡発掘調査報告書』1999 吉井町教委
42	本郷畑内遺跡	弥生後期～平安期の集落	『本郷畑内遺跡』2015 群理文
43	塙川砂戸遺跡	縄文～平安期の集落	『塙川砂戸遺跡』2015 群理文(H25調査分)
44	塙川砂戸遺跡	古墳後期～平安期の集落	『塙川砂戸遺跡(2)』2018 群理文(H27・28調査分)

## 第3章 調査の方法

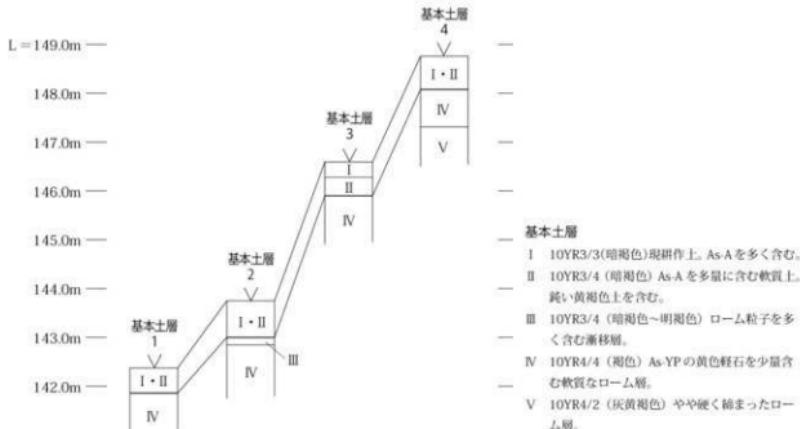
### 第1節 遺跡の調査・記録方法

発掘調査は、遺構確認面となるソフトローム面まで重機による表土除去を行った。遺構の掘り下げには、人力による掘削作業を行った。遺構平面図の作成は、トータルステーション・オートレベルを使用して、各遺構を1/10・1/20を基本として作成した。7区から10区の全体図については、1/40測量を勘測研に委託して行った。遺構断面図の作成は1/20を基本とし、土層覆土の観察にあたった。測量基準点は道路拡幅杭がもつ座標値ならびに国土調査杭を使用した。水準点については、調査区東側の市道に設定された149.1m鉛を使用した。写真撮影は、デジタル一眼レフカメラで各調査段階の記録を撮った。

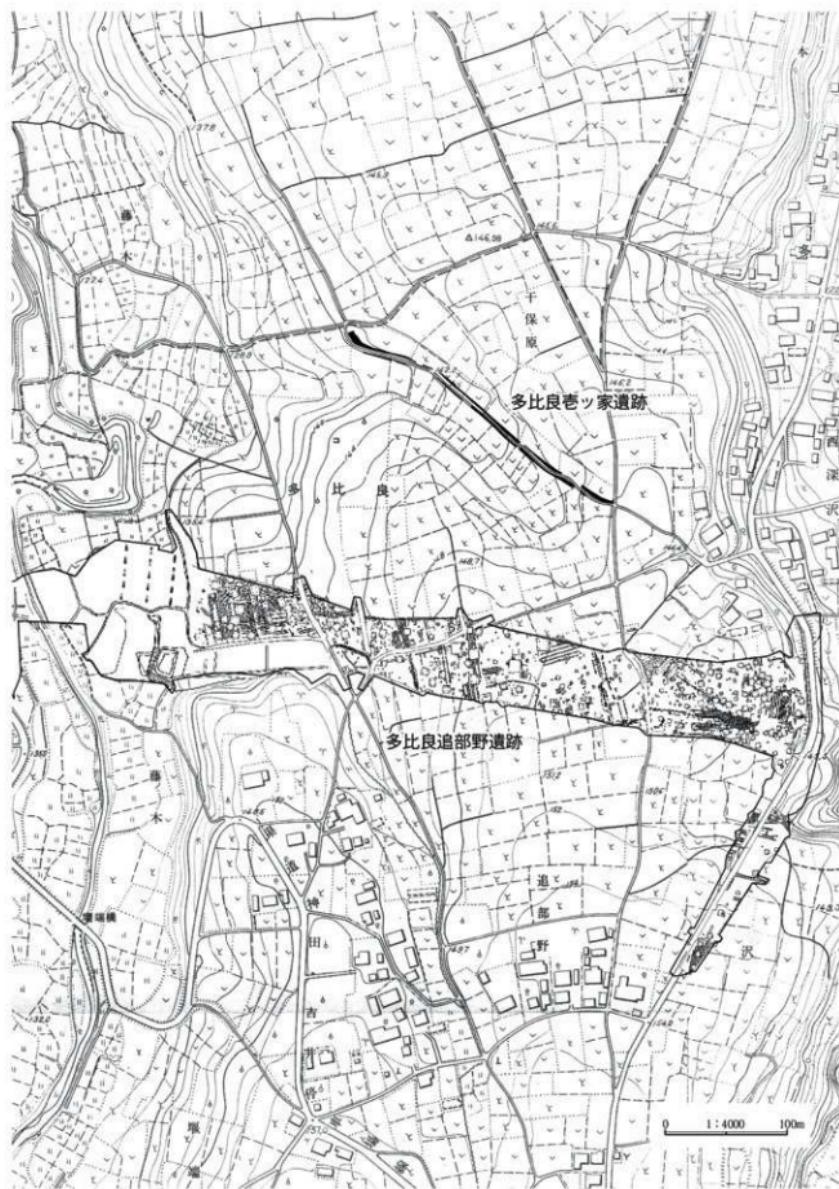
## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 基本土層

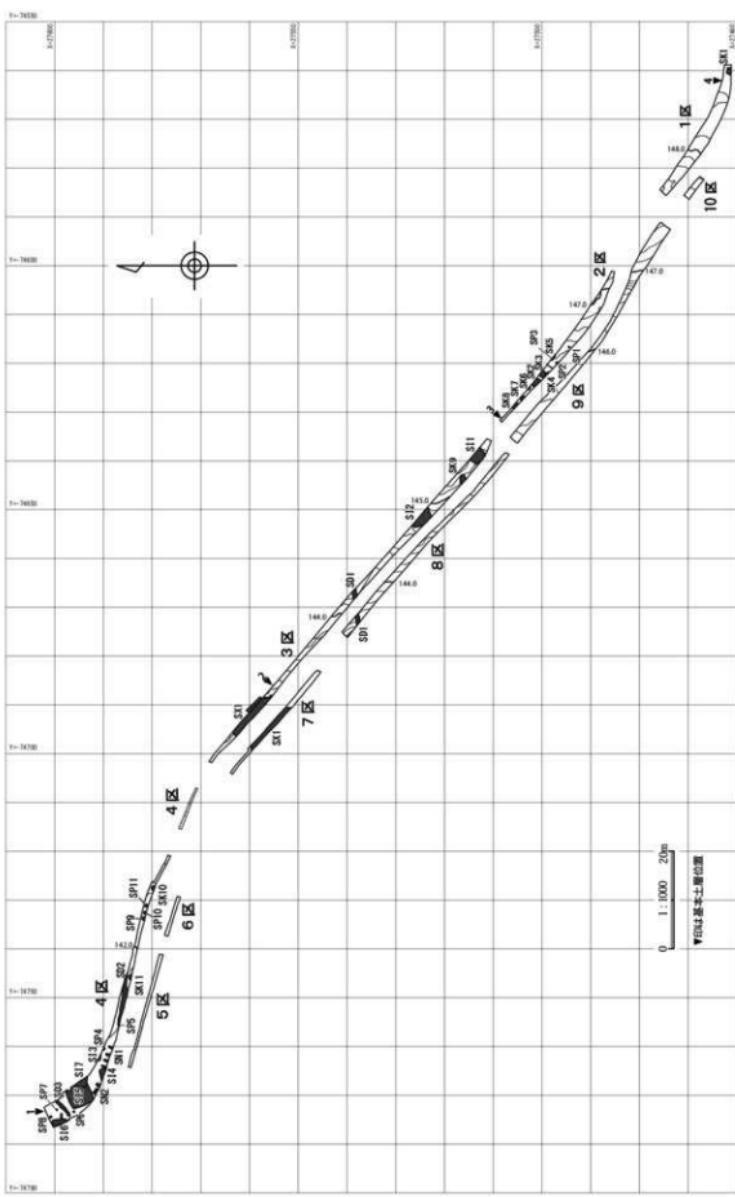
本遺跡は篠川上位段丘面に立地し、西側に矢田川、東側に土合川に挟まれた舌状台地上にある。基盤層は吉井層と呼ばれる泥岩層から成り、その上部に火山噴出物である関東ローム層（Ⅲ層以下）が堆積している。ローム層の上層には、現代に至る黒褐色・暗褐色の表層（I～II層）が堆積している。表層（I～II層）はAs-Aが多く含まれる。As-Bが極少量含まれる黒色軟質層は、調査区内に堆積は見られなかった。表層下のローム層は、ローム粒子を多く含む漸移層Ⅲ層、As-YP（浅間一板鼻黄色軽石）の軽石を少量含む軟質ロームIV層、やや硬くしまった黄色軽石を含むハードロームV層が堆積する。なお、今回は調査の時間上V層以下を掘り下げなかつたが、ハードロームの下層にAs-BP（浅間一板鼻褐色軽石）が広く堆積し、その下層にはAT層（始良Tn火山灰）が薄く堆積する。



第2図 基本土層図



第3図 遺跡位置図（昭和42年『吉井町都市計画図』1/3000を縮小）



第4図 遺跡全体図

## 第2節 深穴住居跡（SI）

### SI 1（遺構：第5図／遺物：第17図）

**位置：**X = 27515・Y = -74640。3区の東端に位置する。**重複：**東辺の壁際をAs-A混土の土坑に切られる。**形態・規模：**正方形か。東西辺は推定2.9 m。確認面からの深さ0.3 mを測る。掘り方底面までの深さは0.5 m。**柱穴：**確認できなかった。**カマド：**西辺に設置される。燃焼面より上層で構築土とみられる白色粘土の範囲を検出した。燃焼面の検出は部分的である。**床面：**ほぼ平坦で中央部分を中心に硬化面を広く確認した。掘り方の深さは約20cmで、ロームブロックを主体とした黒色土ブロックが混じる硬質層を貼り床としている。掘り方形状は住居中央部が高まる土壤状で、SI 2と似た掘り方である。**遺物：**掲載遺物は6点（1～6）で、床面上から土師器甌口縁（3）と底部（6）が出土した。**所見：**出土した遺物から7世紀前半頃と考えられる。

### SI 2（遺構：第5図／遺物：第17図）

**位置：**X = 27525・Y = -74652。3区の東寄りに位置する。**重複：**なし。**形態・規模：**壁面の延長から推定すると正方形か。延長線から推定される規模は、東西辺約4m。深さは0.3～0.45 mで、掘り方底面までの深さは0.65 mを測る。**柱穴：**床面を掘り下げる段階で、東辺寄りでP 1を確認した。**カマド：**確認できなかった。**床面：**ほぼ平坦で中央部分を中心に硬化面を確認した。掘り方の深さは約20cmで、ロームブロックを主体とした黒色土ブロックが混じる硬質層を貼り床としている。掘り方形状は住居中央部が高まる土壤状である。**遺物：**掲載遺物は8点（7～14）で、床面上から、土師器杯（7）、須恵器杯（8・9・10）、磨き石（13）、刀子（14）が出土した。**所見：**出土した遺物から9世紀前半頃と考えられる。

### SI 3（遺構：第6図／遺物：第17図）

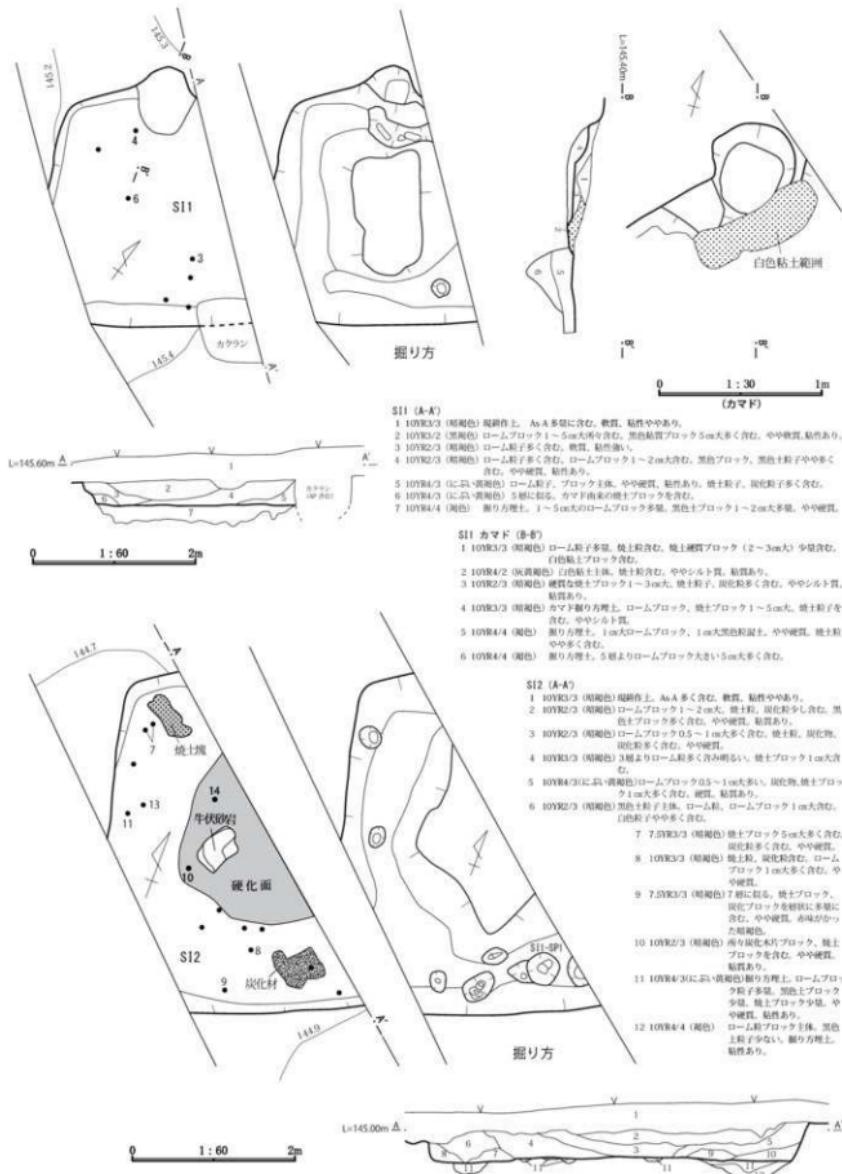
**位置：**X = 27590・Y = -74762。4区西寄りに位置する。**重複：**なし。**形態・規模：**住居跡隅部分をわずかに検出した。深さは0.45 m。壁周溝がめぐると推定される。**遺物：**掲載遺物は1点（15）で覆土中からの出土である。**所見：**出土した遺物から平安期の住居跡と考えられる。

### SI 4（遺構：第6図／遺物：第17図）

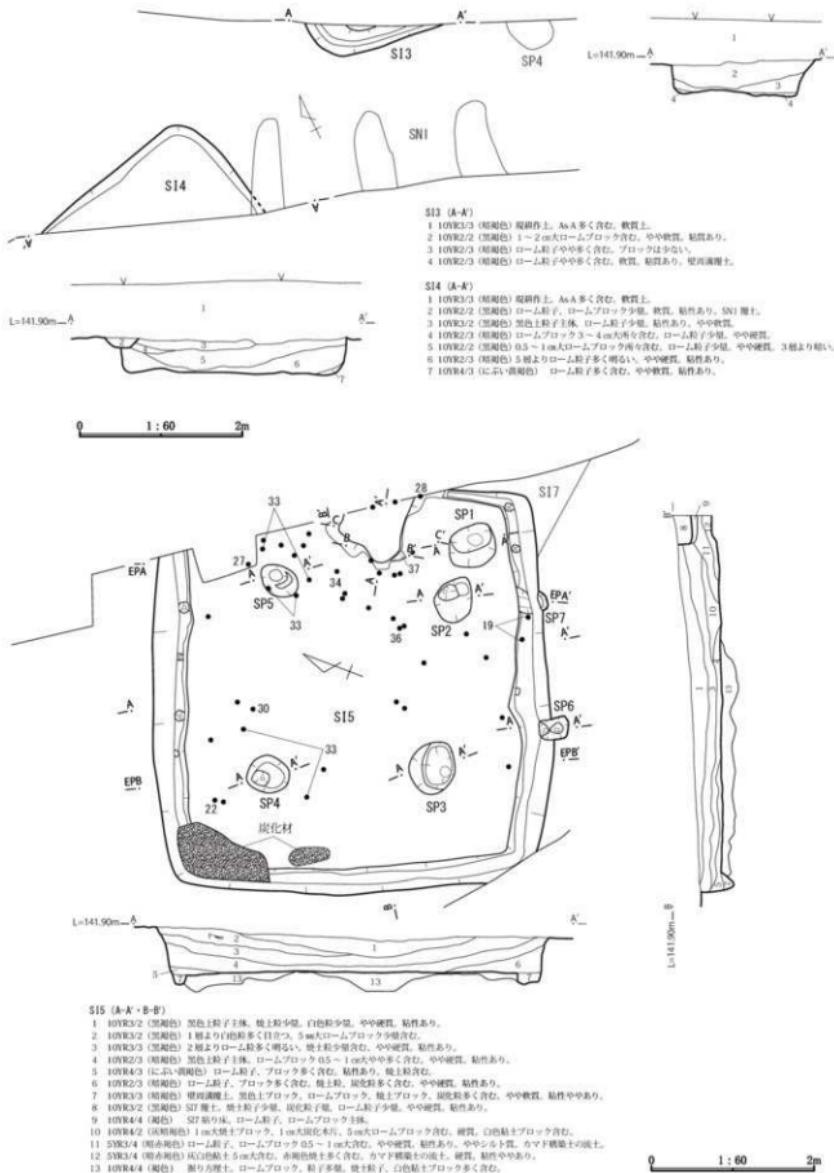
**位置：**X = 27590・Y = -74765。4区西寄りに位置する。**重複：**SN 1に切られる。**形態・規模：**住居跡隅部分をわずかに検出した。深さは0.45 m。**柱穴：**確認できなかった。**カマド：**確認できなかった。**床面：**ほぼ平坦で中央部分を中心に硬化面を確認した。**遺物：**掲載遺物は3点（16～18）。いずれも覆土中からの出土である。18は表面に毛彫り装飾を施した金銅製鉢帶と推定される蛇尾である。**所見：**出土した遺物から8世紀前半頃と考えられる。

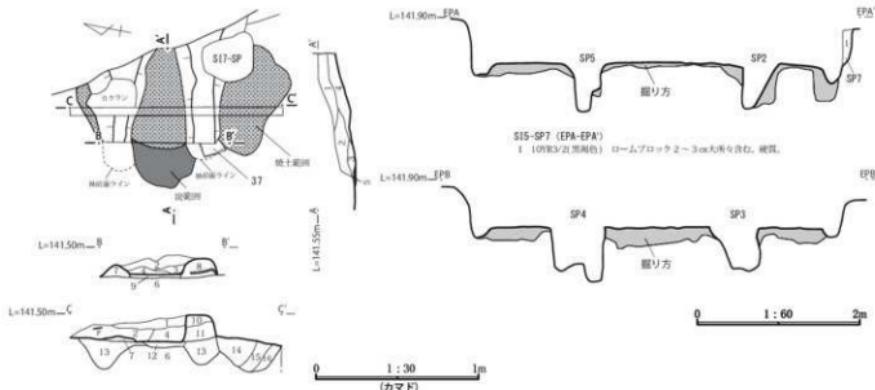
### SI 5（遺構：第6・7図／遺物：第17・18図）

**位置：**X = 27595・Y = -74770。4区の西端に位置する。**重複：**SI 7に切られる。**形態・規模：**ほぼ正方形で壁周溝をもつ。東西辺4.95 m、南北辺4.9 m。確認面からの深さ0.55 mを測る。掘り方底面までの深さは0.7 m。**柱穴：**SP 1～SP 5を確認した。床面からの深さはSP 1が0.6 m、SP 2が0.2 m、SP 3が0.55 m、SP 4が0.45 m、SP 5が0.45 mを測る。住居間口側と推定される南辺の壁際でSP 6とSP 7を検出した。SP 6とSP 7の間口は1.6 mを測る。**カマド：**東辺に設置される。燃焼室奥壁、煙道部は調査区外で確認できなかった。袖部は比較的長く、南側のカマド袖部の残存長は0.75 mを測る。南側のカマド袖部にはカマドを補強する構築材と推定される土師器甌（37）と甌（38）が混入していた（写真P L 10-2・3）。焚口天井石、袖部袖石は見られなかった。袖石抜き取り痕跡も確認できなかった。焚口の幅は33 cmを測る。カマド燃焼室前面は、煤や炭、灰などが集中する範囲



第5図 SI1・SI2 读横図



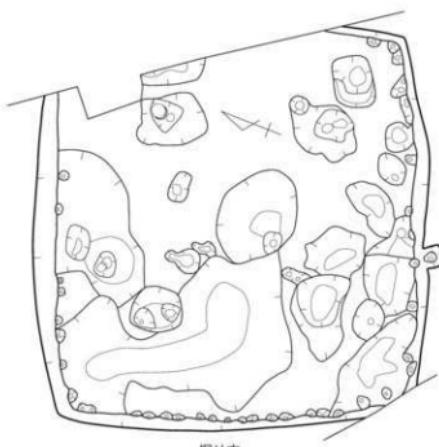


### 515 カマド (A-A'・B-B'・C-C)

1. 10YRS(24英単語)の色紙で、ヨーロッパをよく食べる。練習。ややシルト質。カモアリ原風。  
2. SWAK(24英単語) 1人前よりお腹が大きい。ヨーロッパでよく食べる。ヨーロッパでよく食べる。ややシルト質。  
3. SWAK(24英単語) 1人前よりお腹が大きい。  
4. SWAK(24英単語) 1人前よりお腹が大きい。ヨーロッパでよく食べる。ややシルト質。  
5. 7.5YRS(30英単語) 1人前よりお腹が大きい。ヨーロッパでよく食べる。ややシルト質。粘性少し有り。  
6. SWAK(24英単語) 1人前よりお腹が大きい。ヨーロッパでよく食べる。粘性少し。  
7. 7.5YRS(24英単語) 1人前よりお腹が大きい。  
8. 10YRS(24英単語) ヨーハム風味。ヨーハム風味。  
9. SWAK(24英単語) ヨーロッパでよく食べる。ヨーロッパでよく食べる。硬質。粘性なし。  
10. SWAK(24英単語) ヨーロッパでよく食べる。ヨーロッパでよく食べる。ヨーロッパでよく食べる。硬質。粘性なし。  
11. SWAK(24英単語) ヨーロッパでよく食べる。ヨーロッパでよく食べる。ヨーロッパでよく食べる。硬質。粘性なし。  
12. SWAK(24英単語) ヨーロッパでよく食べる。ヨーロッパでよく食べる。ヨーロッパでよく食べる。硬質。粘性なし。

19. 2024/2/21(月曜日) カヌ下地茶、1杯に似る。白色粒子多く含む硬質土。

- 13. SW3/4(赤)側面部 カド下部、ロームブロック、鏡面リヨウ含む。
  - 13. SW3/4(白)側面部 カド下部面、プロト・シルク含む。
  - 13. SW3/4(白)に赤い赤面 カド下部割り込み、黒面ローム、白面上部ロック、鏡面、8割より鏡上部ロック 大きい、1cm 大きく大きい。
  - 14. SW3/4(赤)に赤い裏面(黒) ロームブロック多く含む、穴軸か土状物の割り込み、カマド割り方を切る。
  - 15. SW3/4(黒)側面部 上部プロト・シルク、鏡面、黒色的な理塗上か。
  - 15. SW3/4(白)側面部 上部プロト・シルク含む。



- S15-SPS (A-A')  
 1. 10YR3/1 (黒褐色) 黒色土粒子多量。腐化粒子、燒土粒子少量。白色粒子少量。  
 2. 10YR3/2 (黒褐色) 1よりヨローム粒子多くやや明るい。ヨローム粒子少。圓いヨロームブロック少量。  
 3. 10YR3/3 (暗褐色) ヨロームのみみられず、白色の結晶質粒子多。

S15-SR1 (4-1)

- 1 10YR3/1(黒褐色) 黒色土粒子主体。白色粒子、塊土粒子、ローム粒子少量。やや硬質。粘性あり。  
2 10YR3/3(褐色) ローム粒子多量。ロームブロック1mmが多く含む。やや硬質。粘性あり。  
3 10YR3/3(暗褐色) ローム粒子多く含む。やや硬質。粘性あり。

SI5-SP2 (A-A')

1. 10YR3/2(黒褐色) 黒色土跡主体。ロームブロック1cm大少しあむ。やや硬質。粘性あり。  
2. 10YR4/4(褐色) ロームブロック1~3cm多くあむ。やや硬質。粘性あり。

1-141-40-

- 

4 10YRS/4

- 10YR3/2 (黒褐色) 黒色土粒子多量。やや硬質。粘性あり。白色粒子。鐵土粒子少量。  
2 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子多く含む。1~2cm 大ロームブロック状多く含む。

S15-SP4 (A-A)

1 BOYR3/2  
2 20MB3/2

200K-3

S15-SP4 (A-A)

1 BOYR3/2

2 10YRAB

4 10YRS/4

- S15-SP4 (A-A')  
1 10YR3/2 (黒褐色) 黒地に粒子多量。砂や硬質。粘性あり。白色粒子。純土粒子少量。  
2 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子多く含む。1-2cm大ロームブロックや砂多く含む。

2 10YRAB



第7図 SI5(2) 遺構図

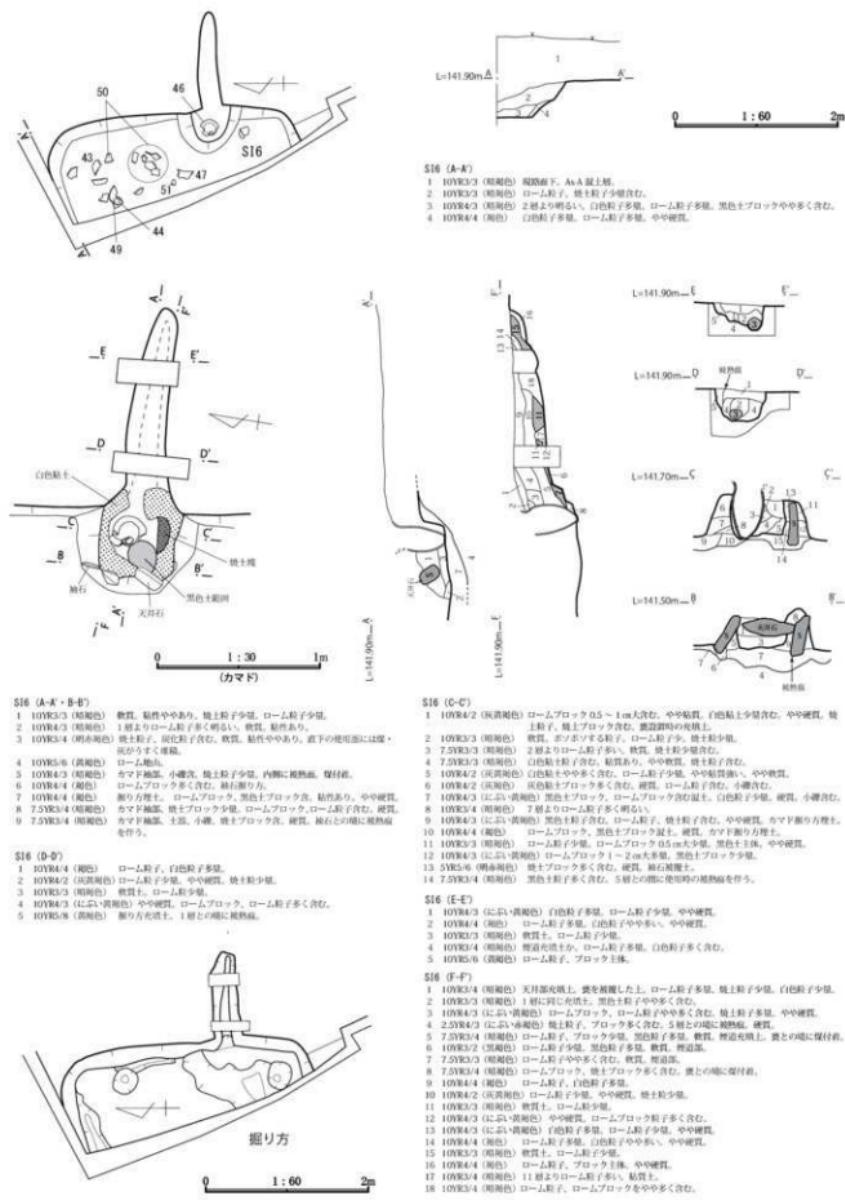
が見られた。燃焼室は使用時の火床面に焼土ブロックが多く見られ、奥壁に向かって緩やかに立ち上がっていた。断ち割り C-C' では、使用時の火床面の下層にさらに一面火床面が見られ、空焚き痕跡と推定される。床面：ほぼ平坦で中央部分、カマド前面を中心し硬化面を広く確認した。掘り方の深さは約 20cm で、ロームブロックを主体とし、焼土、白色粘土、黒色土ブロックが混じる硬質層を貼り床としていた。 遺物：掲載遺物は 24 点（19～42）で、床面上から土師器杯（19）が南壁際から、須恵器蓋（28）が東壁際から、土師器甕（34）がカマド前から出土した。 所見：床面上出土遺物から 7 世紀後半頃と考えられる。

#### SI 6（遺構：第 8 図／遺物：第 19 図）

位置：X = 27600・Y = -74775。4 区の西端に位置する。 重複：なし。 形態・規模：ほぼ正方形か。南北辺 3.1 m。確認面からの深さ 0.45 m を測る。 柱穴：確認できなかった。 カマド：東辺に設置される。燃焼室に甕（46）が設置された状態で検出した。確認された焚口から煙道端部までの長さは 1.78 m を測る。カマド検出面を精査・観察すると、燃焼室上面に白色粘土・ローム粘土の混土で被覆された範囲、焼土ブロックの範囲のほか、約 20cm 径の黒色軟質土の円形範囲が見られた（第 8 図カマド平面図参照）。黒色軟質土の範囲は、甕もしくは鉢が設置されていた部分と推定される。焚口は天井石（牛伏砂岩）がかかるが、原位置から崩れた状態で出土した（PL 10-6 参照）。袖石（牛伏砂岩）は左右とも原位置で確認した。焚口幅は 30cm、袖部の高さは約 40cm を測る。燃焼室の火床面レベルは、焚口から緩やかに上がり、火床面には灰や煤の層が薄く堆積していた。甕の底部設置面は火床面に直置きである（PL 10-7 参照）。甕の奥壁側は焚口からの熱伝導が奥壁へ流れて、焚口側よりも煤が多く付着していた（第 19 図・遺物 46 参照）。燃焼室は奥壁から煙道部へ向かって直立ぎみに立ち上がる。甕を取り外し A-A' で奥壁側を掘り進めたところ、奥壁ほぼ中心で竹管状の 8cm 径の煙道を検出した（PL 10-8 参照）。煙道は一直線に延びず、途中南寄りに曲がるため A-A' の半蔵から F-F' への記録へ変更した。D-D' では竹管状の煙道とその周囲を被覆する充填土を検出した。第 8 図 D-D' の被覆土 5 層の内側で、被熱痕跡を検出した。カマド検出時の上面からも確認できた被熱痕跡で、空焚き痕跡と推定される。E-E' では煙道は南寄りで検出した。F-F' の断ち割りから、煙道ラインは煙道部の底面を沿うように緩やかにのぼり、排煙口となる端部へやや急な角度で斜めに立ち上がっていた。袖部の断ち割りは、B-B' で使用時の 9 層の内側被熱のほかに、南側の袖石内面に強い被熱痕跡を確認した。これも空焚き痕跡と推定される。また断ち割り C-C' では、南側袖部の中で芯材として長さ 28cm、厚さ 8cm の牛伏砂岩を立てて構築していた。北袖に芯材は見られなかった。 遺物：掲載遺物は 9 点（43～51）で、床面上からは口径の大きい土師器杯（43・44）、土師器甕（47）、須恵器甕（49・50）が出土した。 所見：床面上出土遺物から 7 世紀末から 8 世紀初頭と考えられる。

#### SI 7（遺構：第 9 図／遺物：第 19 図）

位置：X = 27595・Y = -74767。4 区の西端に位置する。 重複：SI 5 を切る。 形態・規模：不明。 確認面からの深さ 0.25 m を測る。 掘り方底面までの深さは 0.45 m。 柱穴：床面では確認できなかつたが、SI 5 のカマド袖部に柱穴状の遺構が見られ、SI 7 の柱穴の可能性が考えられる。 カマド：確認できなかった。 床面：ほぼ平坦で硬化面をもつ。 掘り方の深さは約 20cm で、ロームブロックを主体とし黒色土ブロックが所々混じる硬質層を貼り床としている。 遺物：掲載遺物は 2 点（52・53）で、床面上 10cm から高台付塊（52）、土師器甕（53）が出土した。 所見：出土した遺物から 9 世紀後半頃と考えられる。



第8図 SI6 遺構図

### 第3節 土坑跡 (SK)

SK 1~11 (遺構: 第10・11図/表: 第2表)

遺構面のほぼ全域に散在し、11基検出した。各土坑の一覧は第2表にまとめた。2区西寄りでSK 2~SK 8を土坑群として確認した。全てAs-B降下前の遺構である。出土遺物は、各土坑から土師器・須恵器の小片がある。

### 第4節 柱穴跡 (SP)

P 1~11 (遺構: 第12・13図/表: 第3表)

遺構面のほぼ全域に散在し、11本検出した。各柱穴の一覧は第3表にまとめた。全てAs-B降下前の遺構である。出土遺物は、各柱穴から土師器・須恵器の小片がある。

### 第5節 崑跡 (SN)

SN 1~2 (遺構: 第14図)

4区中央より東側に位置する。SN 1は4条のサク列がほぼ等間隔に並ぶ。SN 2は3条のサク列を検出した。サクの幅は0.3~0.4mで、深さは0.1~0.2mを測る。耕作の時期は、重複する8世紀前半のSI 4を切り、As-B降下前の遺構から平安期と推定される。

### 第6節 溝跡 (SD)

SD 1 (遺構: 第15図/遺物: 第19図)

位置: 3区中央と8区東端に位置する。 重複: なし。 確認規模: 確認された走長約7m、幅0.6~0.8m、深さ0.25mを測る。 走行方位: 直線個所ではN-84°E。東高から西低の走行。 遺物: 掘出遺物は1点(54)で叩打痕の礫がある。覆土中から土師器片・須恵器片が出土した。 所見: As-B降下前の遺構で、覆土に平安期の須恵器片を含む。

SD 2 (遺構: 第15図/遺物: 第19図)

位置: 4区中央に位置する。 重複: P 5に切られる。 確認規模: 確認された走長約11m、幅0.85~0.9m、深さ0.1mを測る。 走行方位: 直線個所ではN-85°W。東高から西低の走行。 遺物: 掘出遺物は1点(55)で須恵器片の口縁部片が出土した。 所見: As-B降下前の遺構で、覆土に平安期の須恵器片を含む。

SD 3 (遺構: 第15図)

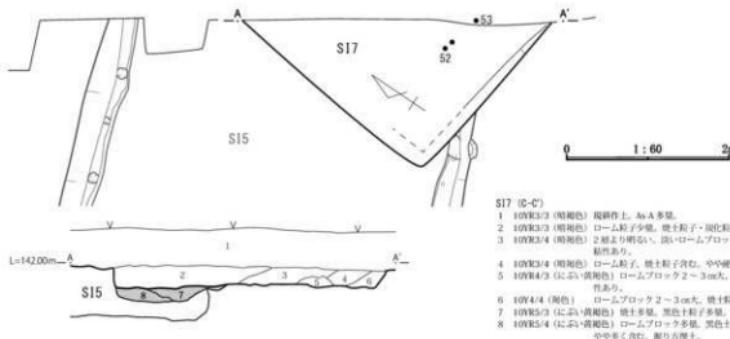
位置: 4区東端に位置する。 重複: なし。 確認規模: 確認された走長約4.3m、幅0.5~0.65m、深さ0.1mを測る。 走行方位: 直線個所ではN-49°W。北東高から南西低の走行。 遺物: なし。 所見: As-B降下前の遺構。

第2表 SK (土坑) 一覧

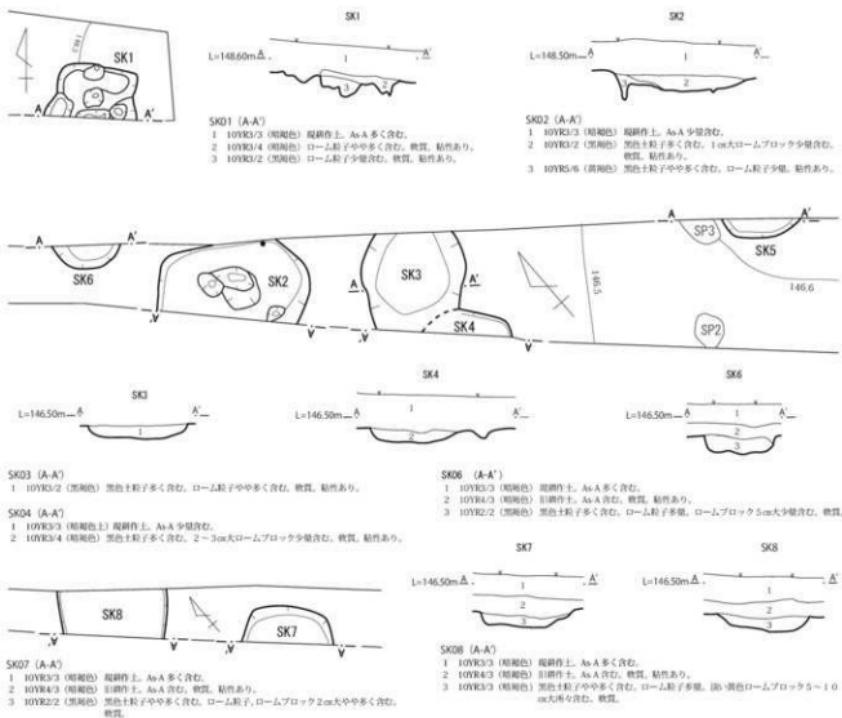
番号	形狀		確認規模 (m)			出土遺物	時期 切り合
	平面	断面	長軸	短軸	深さ		
1 不整円形	—	—	1.5	0.9	0.03	なし	—
2 楕円形	皿状	—	1.9	0.9	0.2	土師器破片	—
3 楕円形	皿状	—	1.2	1.2	0.2	なし	—
4 楕円形	皿状	—	1	—	0.15	なし	SK3を切る
5 —	皿状	—	0.9	—	0.1	なし	—
6 円形	輪形	—	0.8	—	0.13	なし	—
7 円形	皿状	—	1.1	—	0.2	なし	—
8 —	皿状	—	1.2	0.2	—	なし	—
9 不整円形	—	—	1.4	1.3	0.1	なし	—
10 円形	皿状	—	1	0.7	0.3	土師器破片	—
11 円形	皿状	—	1	0.4	0.2	土師器破片	—

第3表 SP (柱穴) 一覧

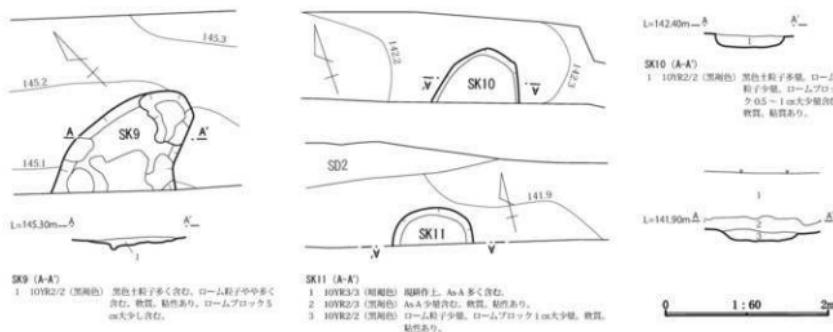
番号	形狀		確認規模 (m)			出土遺物	時期 切り合
	平面	断面	長軸	短軸	深さ		
1 円形	半球形	—	0.3	0.3	0.1	なし	—
2 円形	半球形	—	0.2	0.2	0.2	なし	—
3 楕円形	半球形	—	0.4	0.4	0.3	なし	—
4 円形	半球形	—	0.4	0.2	0.3	なし	—
5 円形	半球形	—	0.3	0.15	0.2	なし	SD2を切る
6 円形	半球形	—	0.3	0.3	0.15	なし	—
7 円形	半球形	—	0.3	0.3	0.3	なし	—
8 円形	半球形	—	0.4	0.4	0.25	なし	—
9 楕円形	半球形	—	0.6	0.5	0.75	土師器破片	—
10 円形	半球形	—	0.5	0.5	0.5	土師器破片	—
11 円形	半球形	—	0.6	0.6	0.5	土師器破片	—



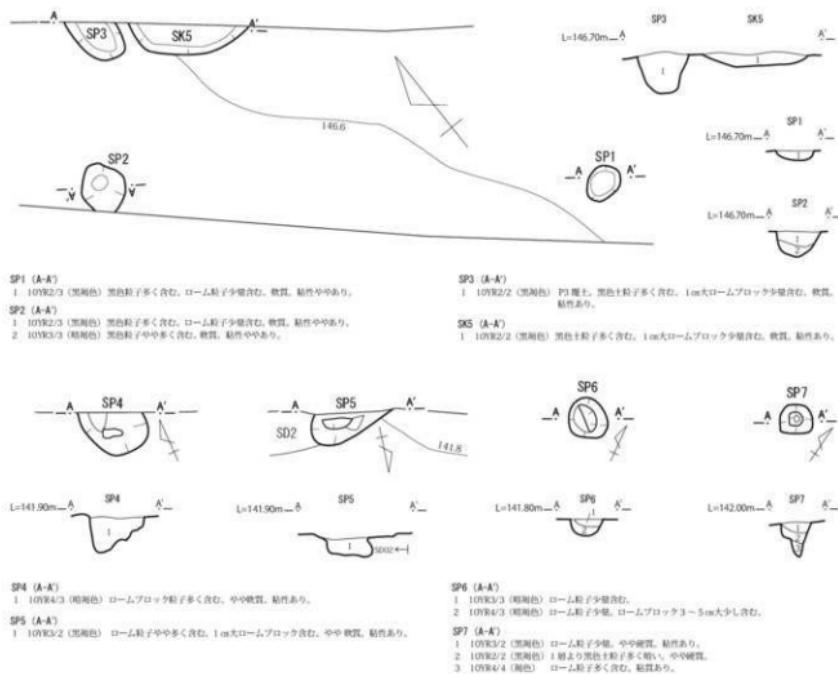
第9図 S17 遺構図



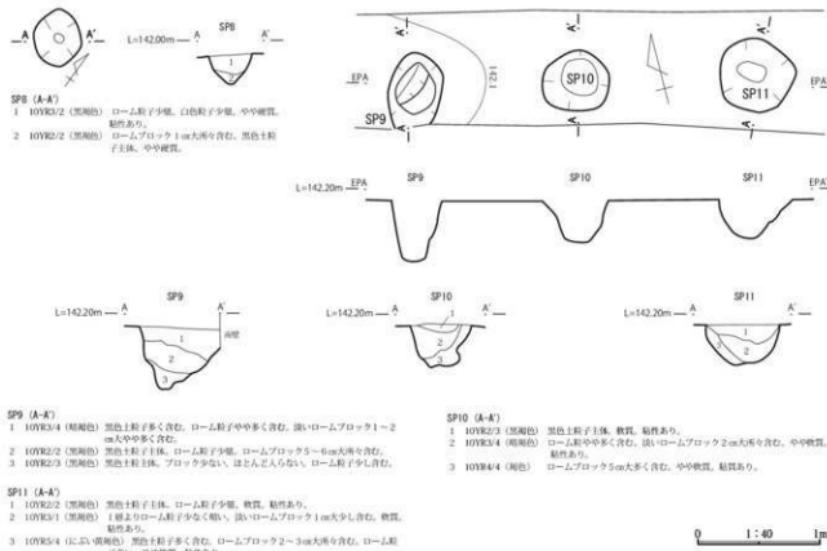
第10図 SK1 ~ SK8 遺構図



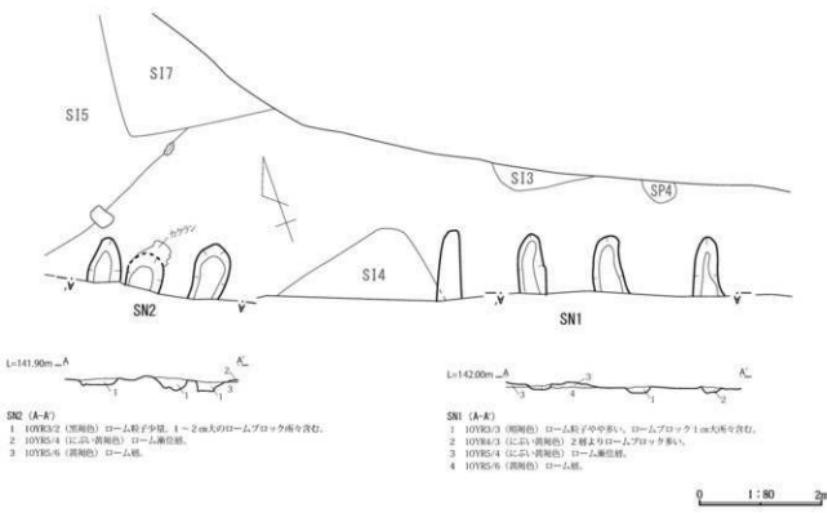
第11図 SK9～SK11遺構図



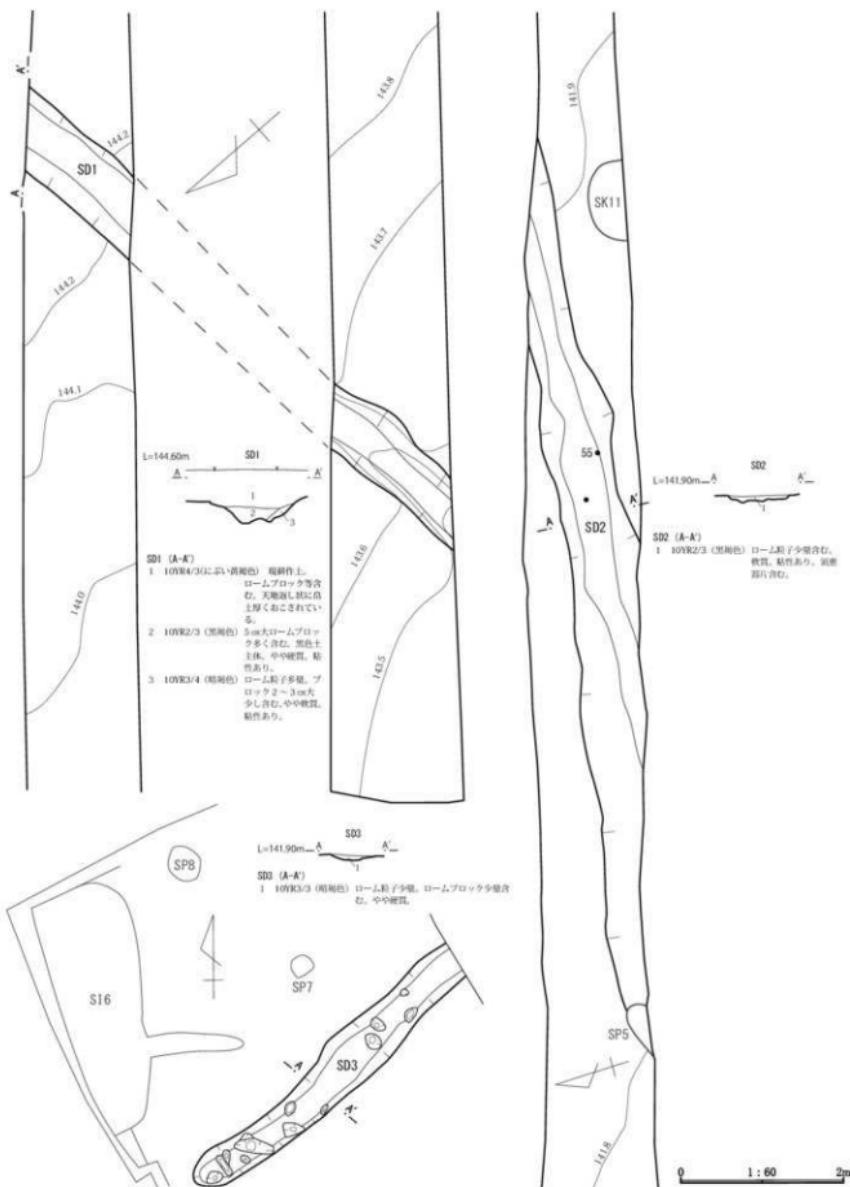
第12図 SP1～SP7遺構図



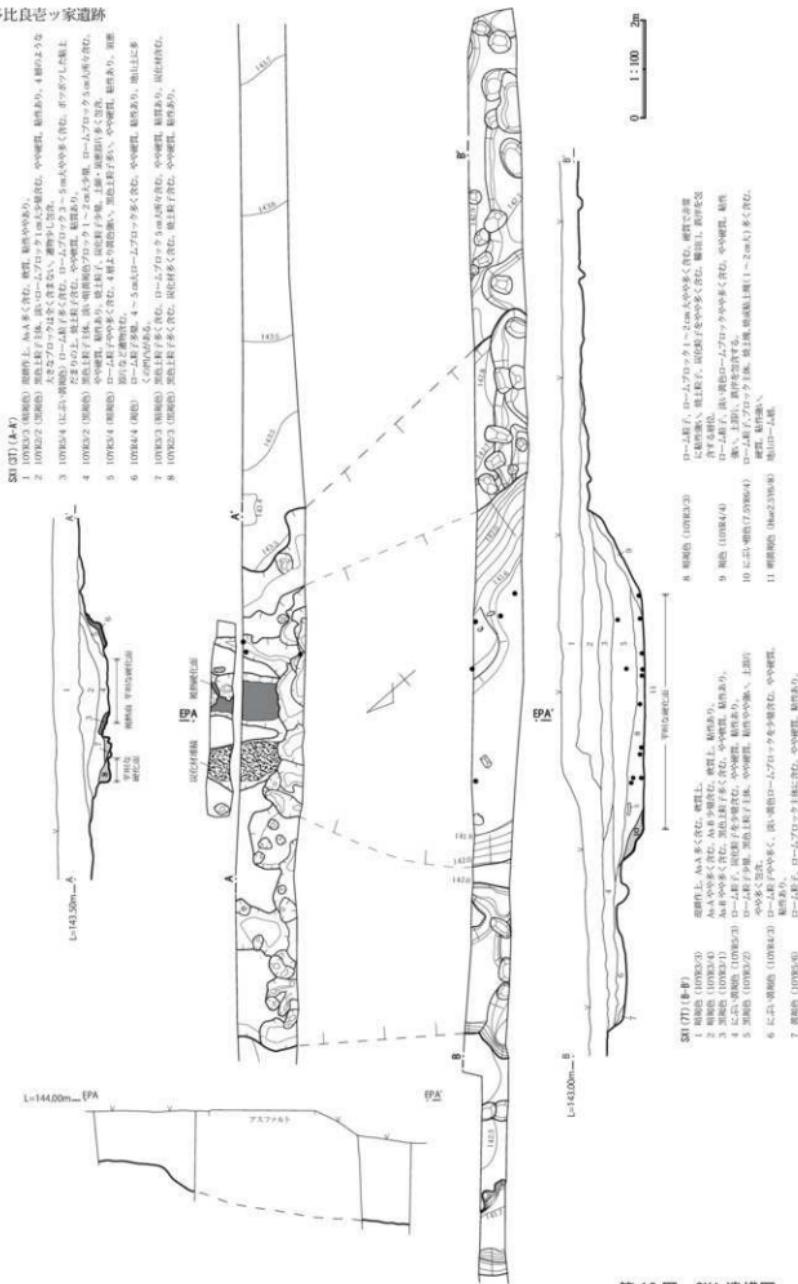
第13図 SP8～SP11遺構図



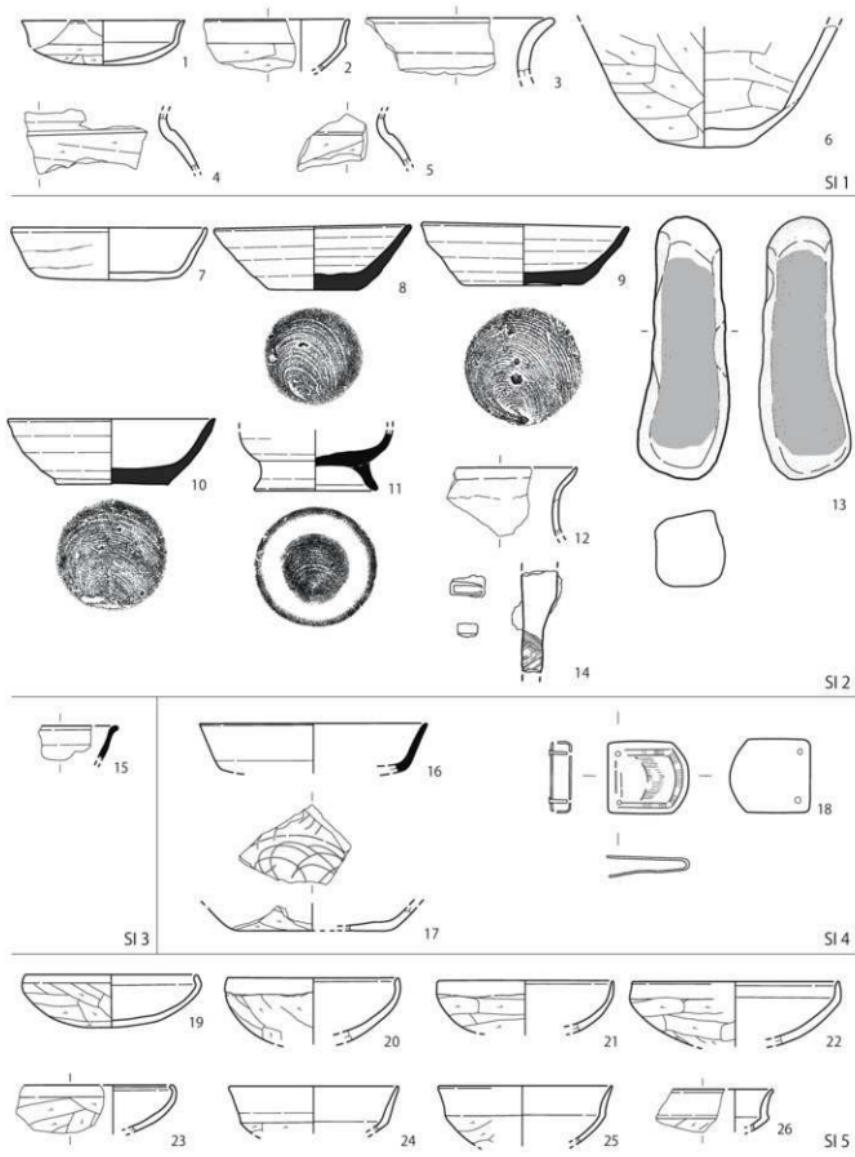
第14図 SN1・SN2 遺構図



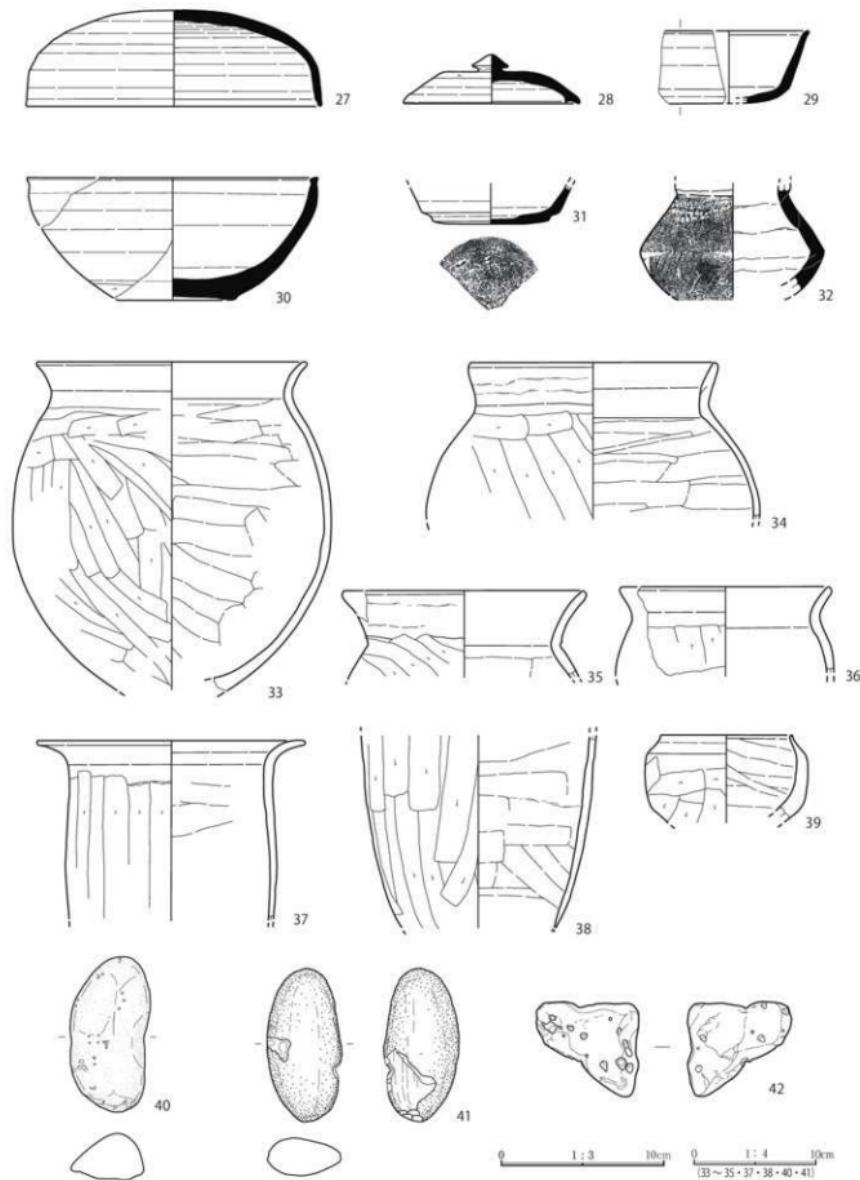
多比良宅之家遺跡



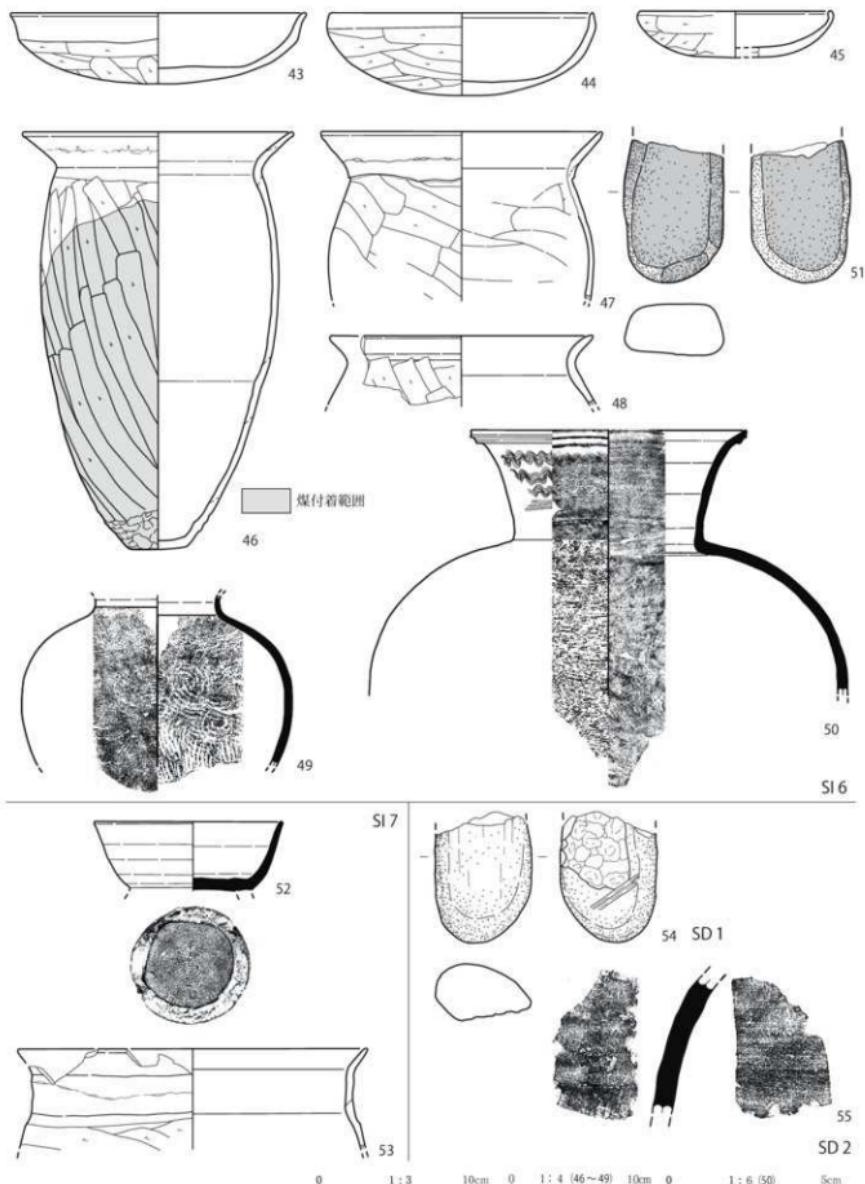
第16図 SX1 遺構図



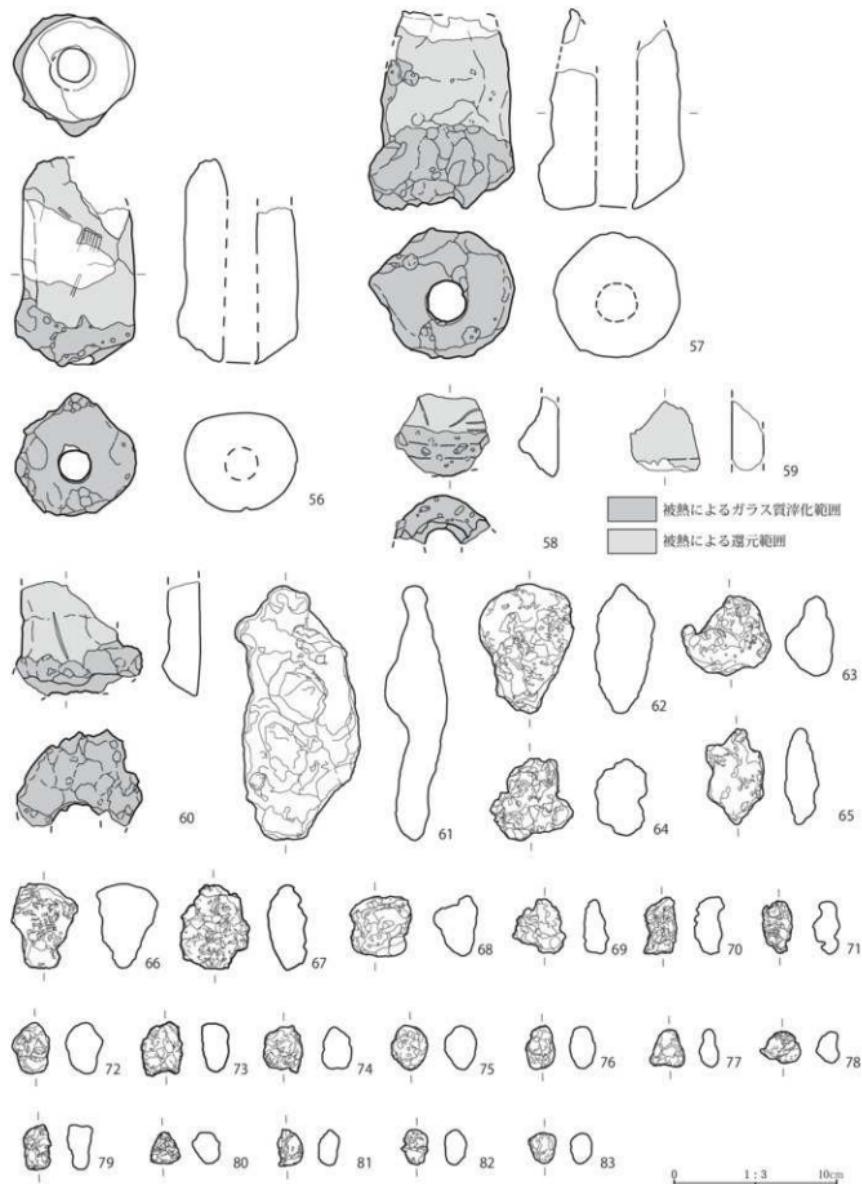
第17図 SI1～SI5出土遺物図



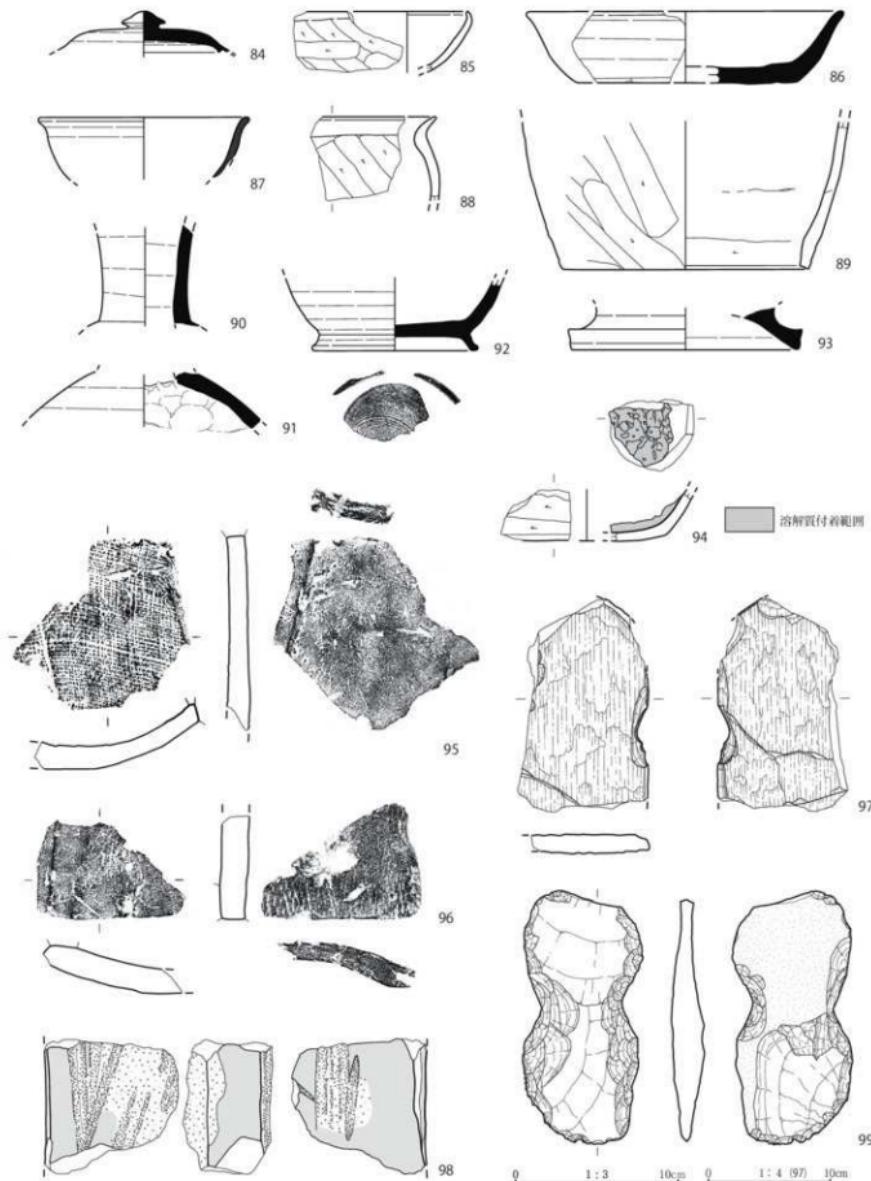
第18図 S15出土遺物図(2)



第19図 S16・S17・SD1・SD2出土遺物図



第20図 SXI出土遺物図(1)

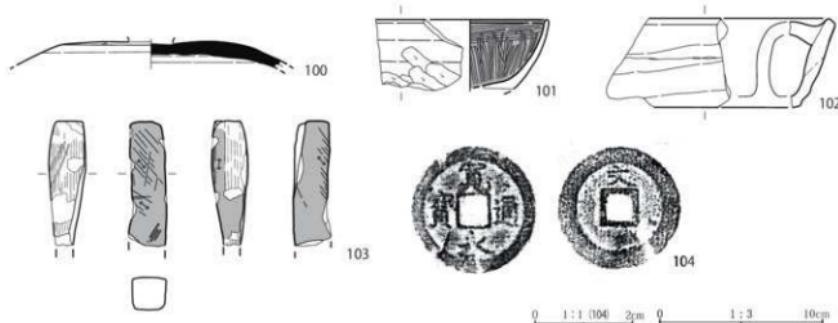


第21図 SX1出土遺物図(2)

## 第7節 性格不明遺構 (SX)

SX 1 (遺構: 第 16 図／遺物: 第 20・21 図)

位置: 3 区西寄りから 7 区にかけて位置する。重複: なし。遺構形状: 矢田川へ向かって開析する旧地形の谷津に直行する位置に遺構を構築。形状は 3 区から 7 区にかけて末広がりの遺構で、1.5 m の比高をもつ。3 区での遺構幅は北壁で 5.5 m、7 区での遺構幅は北壁で 7.3 m を測る。3 区、7 区とも遺構が立ち上がる斜面は大小の凹凸が著しく、なおかつ非常に硬化していた。3 区の遺構底面は、何らかの影響で高温被熱を受け、ローム粘土が白色粘土化あるいは赤褐色化を呈した硬化範囲を検出した (第 16 図・PL 13-2 参照)。さらにその西側で炭化材が集中して出土する範囲を検出した。被熱硬化する範囲と炭化材検出範囲は隣接するが、低い立ち上がりが境界を成して分かれていた。覆土は下層を中心に炭化材や粒子、焼土粒子を多量に含む。特に A-A' 7・8 層に炭化材を多く含む。7 区の遺構底面は、非常に強く硬化した平坦面を検出した。調査幅は狭いが、硬化した平坦な遺構面から人為的な掘削と度重なる使用が推測される。覆土は下層に炭化材、焼土粒子を多く含むほか、特に B-B' 10 層に 1~2 cm 大の壁材に似た焼成粘土塊の破片を多く含む特徴が見られた。遺物: 掘出遺物は 44 点 (56~99) である。7 区の最下層からは羽口 (56~60) のほか鉄滓・鉄塊系遺物 (61~83) が出土した。また 7 区表土中から取鍋 (94) が出土した。3 区拡張部からは砥石 (98) が出土した。所見: As-B 降下前の遺構である。出土した遺物から古墳時代終末期から奈良時代の遺構で、全体像は不明ながら何らかの鉄製造に関わる遺跡の一部と推定される。



第 22 図 遺構外出土遺物図

## 第5章 自然科学分析

### SX1 出土炭化材の放射性炭素年代測定について

(株) パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

#### 1. はじめに

高崎市の多比良壺ツ家遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表4のとおりである。調査区3区で、被熱硬化面のあるSX1から出土した炭化材1点である（第16図A-A' 8層最下面より採取）。炭化材は、最終形成年輪は残存しておらず、部位不明である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

第4表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-40994	調査区：3区構成：SX1	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

#### 3. 結果

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、暦年較正結果を、図23に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界的暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

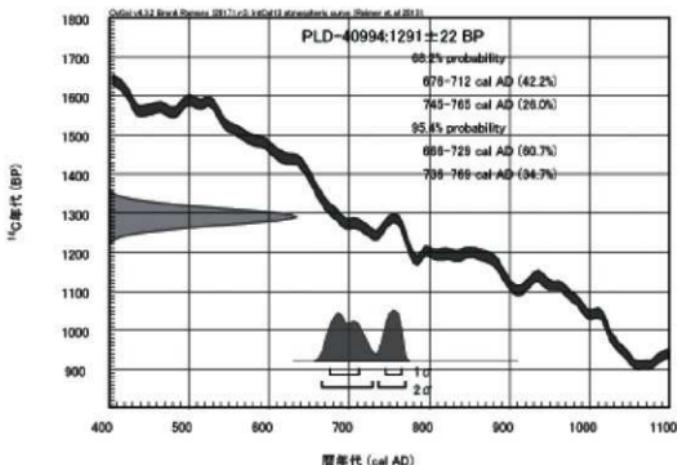
第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-40994	-24.57 $\pm$ 0.25	1291 $\pm$ 22	1290 $\pm$ 20	676-712 cal AD (42.2%) 745-765 cal AD (26.0%)	666-729 cal AD (60.7%) 736-769 cal AD (34.7%)

#### 4. 考察

3区のSX1から出土した炭化材（PLD-40994）は、 $2\sigma$ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目すると、666-729 cal AD (60.7%) および 736-769 cal AD (34.7%) の暦年代を示した。これは7世紀後半～8世紀後半で、飛鳥～奈良時代の暦年代である。

なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回測定した炭化材（PLD-40994）は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。



第23図 暦年較正結果

#### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」日本第四紀学会, 3-20.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50.000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4). 1869-1887.

## 第6章 調査成果

本遺跡は北西・南東方向の丘陵上の傾斜地を約300mの広範囲にわたり、道路拡幅部分について本調査を実施した。拡幅範囲のみという制約から個々の遺構を完掘出来なかつたため、十分な情報を得ることはできなかつたが、多比良壺ツ家・千保原地区の遺跡の広がりを今後検討していく上で、貴重な遺構や遺物を検出した。調査で検出した遺構は、竪穴住居(SI)7軒、土坑(SK)11基、柱穴(SP)11本、溝( SD)3条、畠跡(SN)、性格不明遺構(SX)である。

**竪穴住居跡(SI)** 古墳時代後期から平安時代にかけての集落で、床面出土遺物から推定される詳細な年代変遷は以下のように考えられる。

古墳時代後期 7世紀前半 SI 1 → 7世紀後半 SI 5・SI 6

古墳時代終末期から奈良時代前半 8世紀前半 SI 4

平安時代 9世紀前半 SI 2 → 9世紀後半 SI 3・SI 7

最も古いのは模倣環(1・2)にやや厚手の土師器甕(3・6)を伴うSI 1で、7世紀前半頃と推定される。SI 5は床面直上で口縁部が短く内傾する土師器環(19)、宝珠摘みを有するかえりの短い須恵器蓋(28)、底部が丸底化する土師器甕(33)を伴い7世紀後半頃と推定される。カマド構築材として袖部内に使用された土師器長胴甕(37)は、やや厚手で口縁部が大きく外反する形状で、SI 5 使用土器と時期差はないとみられる。同時期のSI 6は外面縱方向へラ削りが多用された薄手の土師器甕(46)と、口径が18cm・16cmを測る土師器環(43・44)が共伴する。土師器甕の調整、土師器環の形状を比較すると、概ねSI 5は7世紀後半の古相、SI 6は新相段階とみられる。次の段階、SI 4は土師器暗文土器(17)、須恵器環(15)の形状から8世紀前半頃が推定されるが、判断できる遺物が少ない。次の段階、SI 2は床面直上で外反する口縁部の須恵器環(8・9・10)が伴い9世紀前半頃と推定される。最も新しい段階は、外反する口唇部の須恵器甕(13)を伴うSI 3、「コ」字形断面の土師器甕(53)を伴うSI 7で、9世紀後半頃と推定される。

**土坑(SK)** SK 2～8は2区において集中した分布を見せ、一群を成していた。しかし出土遺物が土器小片のため詳細な帰属時期は明らかにできなかった。SK10・11は覆土中に土師器片を伴い、古墳時代以降の遺構と考えられる。

**柱穴(SP)** 4区で検出したSP 9～11は、同じような埋没土と掘り方、深度で、同一掘立柱建物の可能性が考えられる。覆土中には土師器片などを伴い、古墳時代以降の柱穴と推定される。

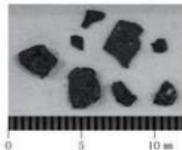
**溝( SD)** SD 1・SD 2は覆土中に土師器片、須恵器片を伴うが、As-B テフラは含まれないので降下以前の遺構と考えられる。SD03は覆土中に As-B テフラを伴う比較的浅い溝で、中世前後の遺構と考えられる。

**SI 4出土金銅製帯金具について** SI 4出土金銅製帯金具(18)は縱幅(帯幅)3cm×横長3.3cmを測る蛇尾で住居覆土中からの出土である。共伴した土師器暗文土器、須恵器環の形状から8世紀前半の資料と推定される。表面には毛彫りによる装飾が施される。2mm弱の鋸留め孔から周囲を方形に区画し、その内部に刻み目文の毛彫りを施す。刻み目文は詳細に観察すると、単位ごとにまとまつた装飾で、単位間には毛彫りのない空白帯が見られ、非常に精細な装飾である。周囲の方形区画の内側は、弧状の毛彫りに沿って垂下した毛彫りを施す。資料の大きさでいえば、馬具の蛇尾よりも大きく鈎帶金具の可能性が高く考えられる。しかしこのような毛彫り装飾を施す跨帶の類例は類い稀で、金銅製跨帶そのものも県下で数例しかないと比較検討が難しい。馬具の金銅製帯金具に施される毛彫り装飾をみると、終末期古墳から出土した馬具に類似した毛彫り装飾の特徴がある。昭和村御門1号墳出土馬具の飾り金具には、SI 4資料の周囲に施した刻み目文と類似した装飾が見られる。また帯先金具(蛇尾)や杏葉には弧状の毛彫りに沿って垂下した毛彫り装飾を施し、SI 4資料と類似している。SI 4資料は馬具飾り金具と類似した装飾の特徴が見られ、その繋がりが推定される。なお、本資料を跨帶蛇尾とすると、装着は養老律令衣服令に従えば、金銀装腰帶は一品以下五位以上と規定される。衣服令をそのまま解釈すると、多胡郡矢田郷域と推定される上位階級者が使用した跨帶となる。しかし蛇尾1点で検討するのは難しいだろう。他県の類例、今後の出土資料を待つて検討する必要がある。

**SX1について** 矢田川へ開析した東西方向の深い自然谷津に直行して掘削された人為的な窯地である。南面を向き、標高の高い北側で遺構幅が狭く、標高の低い南側で遺構幅が広がる。比高のある末広がりの形状で傾斜面を築いている。この遺構は以下のような特殊な様相がみられた。

- 1 窯地の埋没土は炭化粒子、焼土粒子を多く含み、特に最下層に壁材のような焼成粘土塊（1～2cm大）あるいは炭化木片など炭化材がみられる。
- 2 窯地底面はフラットで、部分的にローム層表面は高温の被熱を受けた化学反応により白色粘土化あるいは赤褐色化し、強い硬化面となっていた。
- 3 調査区7区のフラットな遺構最下層、もしくはその直上層から、被熱焼土塊や炭化材に伴って羽口、鉄滓、鉄塊系遺物などが出土した。

以上のような特徴から、遺構全体像は分からぬものの、金属製品の製作に関わる遺構の一部と推定され、鉄精錬遺構あるいは鍛冶関連遺構の可能性が考えられる。遺構が機能した年代は、基底面から共伴した炭化材の自然科学分析（AMS年代測定）から7世紀後半から8世紀後半という年代幅が示され、古墳時代終末期から奈良時代の遺構と推定される。なお、鉄滓および鉄塊系遺物を洗浄した僅かな残留砂粒から、鍛造剝片とみられる細片を採取したので参考資料として掲載した（右写真）。



SX1 鉄塊系遺物付着物

## &lt;参考文献&gt;

- 吉井町誌編纂委員会 1974『吉井町誌』  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『多比良追部野遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第213集  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『矢田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第106集  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991『矢田遺跡II』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第115集  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『矢田遺跡VII』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第220集  
 吉井町教育委員会 1999『藤ノ木遺跡』吉井町発掘調査報告書第49集  
 小林敏夫 1988「群馬県出土の腰帶具について」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 織貫邦男 1990「鍔帯から見た律令制の一侧面—群馬県終末期古墳出土の鍔帯から—」『群馬考古学手帳』Vol. 1  
 国立歴史博物館考古学研究室 1984『考古学研究室発掘調査報告書』考古学研究室報告 甲種第3冊  
 昭和村教育委員会 1996『川原畠原1号墳』昭和村埋蔵文化財発掘調査報告書第5集  
 関根真隆 1974『奈良朝服飾の研究』吉川弘文館

第6表 遺物観察表

51 出土遺物			法量 (cm)	①焼成・色調③胎土④残存	成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
番号	固形	器種				
1 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：(10.0) 底径：— 高さ：[2.8]	①焼化 ②褐色 ③雲母、石英、片岩、角閃石 ④1/4	外面 口縁部横削で、体部～底部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-1 残	
2 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：— 底径：— 高さ：[3.2]	①焼化 ②褐色 ③石英、角閃石、黒色粒	外面 口縁部横削で、体部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-1 残	
3 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：— 底径：— 高さ：[3.5]	①焼化 ②褐色 ③雲母、石英、片岩、軟質赤褐色粒、黒色粒 ④口縁部	外面 口縁部横削で。 内面 口縁部横削で。	SII-4 床から9cm上	
4 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：— 底径：— 高さ：[3.5]	①焼化 ②褐色 ③雲母、石英、角閃石、軟質赤褐色粒	外面 体部窪削り。 内面 体部撫で。	SII-2-1 残 床から12cm上	
5 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：— 底径：— 高さ：[3.0]	①焼化 ②褐色 ③雲母、石英、軟質赤褐色粒、黒色粒 ④強腹、破片	外面 体部窪削り。 内面 体部撫で。	SII-1 残	
6 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：(5.0) 底径：(5.0) 高さ：[7.3] ④底部	①焼化 ②暗褐色 ③雲母、石英、片岩、角閃石、軟質赤褐色粒 ④底部	外面 体部～底部窪削り。 内面 体部～底部撫で。	SII-3 床から2cm上	
52 出土遺物			法量 (cm・g)	①焼成・色調③胎土④残存	成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
番号	固形	器種				
7 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：12.0 底径：8.8 高さ：3.2	①焼化 ②褐色 ③雲母、石英、片岩、角閃石 ④1/2	外面 口縁部横削で、体部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-1.2 床から7cm	
8 第17回 P.L.14	須恵器 灰(鉢質)	口径：12.0 底径：5.4 高さ：3.8	①やや焼化 ②褐色 ③石英、軟質褐色粒、黒色粒、片岩粒 ④完形	外面 ロクロ整形、底部右回転糸切り。 内面 ロクロ整形。	SII-11 床から6cm	
9 第17回 P.L.14	須恵器 灰(鉢質)	口径：12.6 底径：7.5 高さ：3.6	①焼化 ②黄褐色 ③雲母、石英、角閃石、軟質褐色粒、黒色粒 ④完形	外面 ロクロ整形、底部右回転糸切り。 内面 ロクロ整形。	SII-12 床から6cm	
10 第17回 P.L.14	須恵器 灰(鉢質)	口径：12.7 底径：7.0 高さ：4.0	①焼化がみ ②灰褐色 ③石英、片岩、安山岩、軟質赤褐色粒 ④3/4	外面 ロクロ整形、底部右回転糸切り。 内面 ロクロ整形。	SII-6 床から1cm	
11 第17回 P.L.14	須恵器 高台付輪か	口径：— 底径：7.4 高さ：[3.7]	①還元炎 ②灰色 ③須恵器黒面裏点（鉄分）、白色石英細粒 ④高台のみ	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。 回転糸切り	SII-4 床から10cm	
12 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：— 底径：— 高さ：[4.1]	①焼化 ②褐色 ③石英、角閃石、黒色粒、片岩粒 ④口縁部 破片	外面 口縁部横削で。 内面 口縁部横削で。 ゴ子型張	SII-1 撫り方	
13 第17回 P.L.14	石器品 研磨石	長さ21.5 幅7.0 厚さ6.0 重さ1638				SII-13 床から2cm
14 第17回 P.L.14	石器品 刀子	長さ4.2 重さ8				SII-5 床から4cm
53 出土遺物			法量 (cm)	①焼成・色調③胎土④残存	成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
番号	固形	器種				
15 第17回 P.L.14	須恵器 灰	口径：— 底径：— 高さ：[2.0]	①還元 ②黄褐色 ③雲母、石英、軟質赤褐色粒 ④口縁部 破片	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SII-1 残	
54 出土遺物			法量 (cm・g)	①焼成・色調③胎土④残存	成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
番号	固形	器種				
16 第17回 P.L.14	須恵器 灰	口径：(14.0) 底径：— 高さ：[3.0]	①焼化 ②灰褐色 ③須恵器褐色粒、黒色粒 ④口縁部 破片	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。 古丹青	SII-1 残	
17 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：— 底径：(9.0) 高さ：[1.5]	①焼化 ②暗褐色 ③石英、角閃石、黒色粒、片岩、軟質赤褐色粒 ④底部 破片	外面 体部～底部窪削り。 内面 体部撫でで、底部暗青。	SII-1 残	
18 第17回 P.L.14	金貝具(蛇尾)	帶幅3.3 横長2.30 厚さ0.9		金附製。表面に鈎み目文など毛彫り装飾。	SII-1 残	
55 出土遺物			法量 (cm・g)	①焼成・色調③胎土④残存	成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
番号	固形	器種				
19 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：10.5 底径：— 高さ：3.2	①焼化 ②暗褐色 ③雲母、角閃石、雲母黑色粒 ④口縁部 破片	外面 口縁部横削で、体部～底部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-25.26 床から5cm	
20 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：(11.0) 底径：— 高さ：[3.6]	①焼化 ②褐色 ③口縁部 破片	外面 口縁部横削で、体部～底部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-8.C	
21 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：(11.0) 底径：— 高さ：[3.2]	①焼化 ②暗褐色 ③角閃石、軟質赤褐色粒、軟質黑色粒 ④口縁部 破片	外面 口縁部横削で、体部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-カマド	
22 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：(13.0) 底径：— 高さ：[4.0]	①焼化 ②にごり 黄褐色 ③雲母、石英、黒色細粒、精密 ④口縁部 破片	外面 口縁部横削で、体部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-5 床から25cm	
23 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：— 底径：— 高さ：[3.0]	①焼化 ②褐色 ③石英、角閃石、黒色細粒 ④口縁部 破片	外面 口縁部横削で、体部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-8	
24 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：(10.4) 底径：— 高さ：[2.8]	①焼化 ②褐色 ③石英、角閃石、軟質赤褐色粒、黒色粒 ④口縁部 破片	外面 口縁部横削で、体部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-8	
25 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：10.7 底径：— 高さ：[4.0]	①焼化 ②褐色 ③石英、角閃石、白色細粒、軟質粒 ④口縁部 破片	外面 口縁部横削で、体部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-8	
26 第17回 P.L.14	土師器 灰	口径：— 底径：— 高さ：[2.6]	①焼化 ②褐色 ③雲母、角閃石、黒色細粒 ④口縁部 破片	外面 口縁部横削で、体部窪削り。 内面 口縁部横削で、体部撫で。	SII-8	
27 第18回 P.L.14	須恵器 灰	口径：(18.0) 底径：— 高さ：[5.8]	①還元 ②灰色 ③白色石英、硬質灰白色石英、角閃石、片岩粒 ④1/1程度	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SII-44.B 床から30cm	

番号	図版	器種	法量 (cm・g)	①焼成土色調3(陶土)4(残存)			成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
				外面	内面	内面		
28	第18図 PL 14	須恵器 蓋	口径: 10.7 底径: 一 高さ: [7.0]	①還元 ②灰色 ③白色土黄、硬質灰白色石英。片状粒 ④はう形	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SIS-40 東側開床から 0 cm		
29	第18図 PL 14	須恵器 环	口径: 一 底径: 一 高さ: [4.5]	①還元 ②灰黄色 ③灰白色石英。軟質黑色粒。凝集石英粒 ④1/8	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SIS-B		
30	第18図 PL 14	須恵器 环	口径: [17.8] 底径: 7.0 高さ: [7.4]	①還元 ②灰白色 ③白色土黄、硬質灰白色石英。片状粒。凝集石英粒 ④1/3	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SIS-2.B.D 床から 30 cm		
31	第18図 PL 14	須恵器 环	口径: 一 底径: [7.1] 高さ: [2.5]	①還元 ②オリーブ黑色 ③白色土黄、凝集石英粒 ④無	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SIS-D		
32	第18図 PL 14	須恵器 切頭頭部	口径: 一 底径: 一 高さ: [7.0]	①還元 ②暗褐色 ③白色土黄、片状粒 ④1/2	外面 ロクロ整形。胴部平行叩き。 内面 ロクロ整形。	SIS-A.D		
33	第18図 PL 15	土師器 蓋	口径: [22.0] 底径: 一 高さ: [26.9]	①焼化 ②暗褐色 ③白色土黄、片状粒、角閃石、雲母 ④1/2	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-3.6.8.11. 13.16.B.D.一括 床から 18 cm		
34	第18図 PL 15	土師器 蓋	口径: 20.5 底径: 一 高さ: [13.0]	①焼化 ②にい・黄褐色 ③石英、角閃石。軟質赤褐色粒、凝集石英粒 ④口縁部 3/5	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-17.B 床から 2 cm		
35	第18図 PL 15	土師器 蓋	口径: [20.0] 底径: 一 高さ: [7.0]	①焼化 ②褐色 ③雲母、石英、角閃石。軟質赤褐色粒 片状粒、口縁部 1/8	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-A.B		
36	第18図 PL 15	土師器 蓋	口径: [13.0] 底径: 一 高さ: [5.5]	①焼化 ②にい・赤褐色 ③灰白色石英。雲母、片岩。 ④口縁部	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-3.6 床から 18 cm		
37	第18図 PL 15	土師器 蓋	口径: 一 底径: 一 高さ: [14.8]	①焼化 ②褐色 ③石英、片岩、角閃石。黒色細粒 ④口縁部 1/2	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-4.1.B カマド構築材		
38	第18図 PL 15	土師器 蓋	口径: 一 底径: 一 高さ: [16.0]	①焼化 ②明褐色 ③片岩、石英、角閃石。軟質赤褐色粒 ④軸部	外面 体部斜削り。 内面 体部斜彌で。	SIS-カマド カマド構築材。袖部か ら出土		
39	第18図 PL 15	知恵頭	口径: [8.0] 底径: 一 高さ: [5.4]	①焼化 ②にい・黃褐色 ③灰白色石英。黑色粒 ④口縁部～胴部 1/4弱	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-C		
40	第18図 PL 15	こも編み石	粘晶片岩	長さ 12.8 幅 6.4 厚さ 3.7 重さ 434			SIS-33. 床から 20 cm	
41	第18図 PL 15	こも編み石	粘晶片岩	長さ 12.6 幅 6.0 厚さ 3.1 重さ 354			SIS-B	
42	第18図 PL 15	不明石製品	シルト岩	長さ 6.4 幅 5.6 厚さ 2.0 重さ 26	荷重不明。多孔質の海綿シリト岩。		SIS-C	

## SIS1出土遺物

番号	図版	器種	法量 (cm・g)	①焼成土色調3(陶土)4(残存)			成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
				外面	内面	内面		
43	第19図 PL 15	土師器 环	口径: 18.2 底径: 一 高さ: [6.0]	①焼化 ②褐色 ③雲母、石英、片岩粒。黒色粒 ④1/2	外面 口縁部横彌で、体部～底部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-2.一括 床から 8 cm		
44	第19図 PL 15	土師器 环	口径: 16.2 底径: 一 高さ: [5.0]	①焼化 ②褐色 ③石英、角閃石。片岩粒、黒色粒 ④3/4	外面 口縁部横彌で、体部～底部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-10.一括 床から 3 cm		
45	第19図 PL 15	土師器 环	口径: 一 底径: 一 高さ: [3.0]	①焼化 ②褐色 ③石英、角閃石。片岩粒、黒色粒 ④1/5	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-6.一括		
46	第19図 PL 15	土師器 蓋	口径: 22.0 底径: 4.6 高さ: [34.2]	①焼化 ②にい・黄褐色 ③石英、角閃石。白色細粒、黒色細粒 ④はう形	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-16.カマド		
47	第19図 PL 15	土師器 蓋	口径: [21.8] 底径: 一 高さ: [13.8]	①焼化 ②浅黄色 ③石英、片岩、片岩、角閃石、黒色粒 ④口縁部 1/2弱	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。	SIS-13.一括 床から 8 cm		
48	第19図 PL 15	土師器 蓋	口径: 21.8 底径: 一 高さ: [5.8]	①焼化 ②にい・褐色 ③雲母、石英、片岩、軟質褐色粒、黒色粒 ④口縁部	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜削り。	SIS-カマド		
49	第19図 PL 15	須恵器 蓋	口径: 一 底径: 一 高さ: [24.0]	①還元 ②黄褐色 ③石英、片岩、硬質灰白色石英、凝集石英粒 ④1/4	外面 横の平行叩き。 内面 青緑波文当て具組。	SIS-9 床から 8 cm		
50	第19図 PL 15	須恵器 蓋	口径: [34.0] 底径: 一 高さ: [33.0]	①還元 ②褐色 ③石英、硬質灰白色石英、凝集石英粒 ④1/2	外面 口縁部クロロ彌、口縁部 3 番の波状 I 番の平行文。体部粘土紐組き上げ具組。 内面 青緑波文当て具組。	SIS-3.4.5.7. 11.12 床から 4 cm		
51	第19図 PL 16	磨き石 (閃輝石)	流紋岩片 (閃輝石)	長さ 7.5 幅 5.4 厚さ 2.6 重さ 213	荷重不明。多孔質の海綿シリト岩。		SIS-14. 床から 3 cm	

## SIS2出土遺物

番号	図版	器種	法量 (cm)	①焼成土色調3(陶土)4(残存)			成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
				外面	内面	内面		
52	第19図 PL 16	須恵器 高台(口縁)	口径: (11.7) 底径: (7.5) 高さ: [4.1]	①還元 ②灰褐色 ③石英、軟質褐色粒、黒色細粒 ④2/3	外面 ロクロ整形、高台部削離。	内面 ロクロ整形。	SIS-1 床から 10 cm	
53	第19図 PL 16	土師器 蓋	口径: (19.0) 底径: 一 高さ: [5.5]	①焼化 ②褐色 ③石英、角閃石。片岩粒、黒色粒 ④1/5	外面 口縁部横彌で、体部斜削り。 内面 口縁部横彌で、体部斜彌で。		SIS-3 床から 10 cm上	

## SD1出土遺物

番号	図版	器種	法量 (cm・g)	①焼成土色調3(陶土)4(残存)			技術等の分類	出土位置・注記
				外面	内面	内面		
54	第19図 PL 16	石製品	長さ 7.9 幅 5.9 厚さ 2.2 重さ 233	粘晶片岩。片面に凹凸痕。			SD1(BT)一括	

## SD2出土遺物

番号	図版	器種	法量 (cm)	①焼成土色調3(陶土)4(残存)			成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
				外面	内面	内面		
55	第19図 PL 16	須恵器 蓋	口径: 一 底径: 一 高さ: [8.5]	①還元 ②暗褐色 ③白色土黄、凝集石英粒 ④面部	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。		SD2-I	

## SX1出土物

番号	固形	器種	法量 (m・g)	①焼成・色調・断面	焼成等の分類	出土位置・注記	
56	土製品 銚口	長さ 12.8	幅 6.8 ~ 7.4 重さ 418	①褐色	SX1(7T) 級下崩		
57	土製品 銚口	長さ 残 11.6	幅 6.0 ~ 9.0 重さ 419	②褐色	SX1(7T) 下崩		
58	土製品 銚口	長さ 4.8	重さ 36	③白色	SX1(7T) 下崩		
59	土製品 銚口	長さ 残 4.0	重さ 23	④白色	SX1(7T) 下崩		
60	土製品 銚口	長さ 残 8.0	重さ 104	⑤白色	SX1(7T) I		
61	鉄塊系遺物	長さ 15.6	厚さ 3.8	重さ 387	SX1(7T) 下崩		
62	鉄塊	長さ 8.0	厚さ 3.6	重さ 206	SX1(7T) 級下崩		
63	鉄塊	長さ 4.8	厚さ 2.9	重さ 71	SX1(7T) 級下崩		
64	鉄塊	長さ 4.7	厚さ 3.2	重さ 49	SX1(7T) 級下崩		
65	鉄塊	長さ 5.8	厚さ 2.1	重さ 36	SX1(7T) 級下崩		
66	鉄塊	長さ 5.2	厚さ 3.7	重さ 51	SX1(7T) 級下崩		
67	鉄塊	長さ 5.1	厚さ 2.4	重さ 70	SX1(7T) 級下崩		
68	第 20 回 P L 16	鉄塊系遺物	長さ 3.7	厚さ 2.7	重さ 42	SX1(7T) 級下崩	
69	鉄塊	長さ 3.3	厚さ 1.5	重さ 11	SX1(7T) 級下崩		
70	鉄塊	長さ 3.4	厚さ 1.8	重さ 15	SX1(7T) 級下崩		
71	鉄塊	長さ 3.2	厚さ 1.6	重さ 6	SX1(7T) 級下崩		
72	鉄塊系遺物	長さ 3.1	厚さ 2.3	重さ 19	SX1(7T) 級下崩		
73	鉄塊	長さ 3.0	厚さ 1.8	重さ 13	SX1(7T) 級下崩		
74	鉄塊系遺物	長さ 2.6	厚さ 1.8	重さ 13	SX1(7T) 級下崩		
75	鉄塊系遺物	長さ 2.7	厚さ 2.0	重さ 12	SX1(7T) 級下崩		
76	鉄塊系遺物	長さ 2.6	厚さ 1.6	重さ 9	SX1(7T) 級下崩		
77	鉄塊系遺物	長さ 2.3	厚さ 1.2	重さ 5	SX1(7T) 級下崩		
78	鉄塊	長さ 1.9	厚さ 1.4	重さ 7	SX1(7T) 級下崩		
79	鉄塊	長さ 2.7	厚さ 1.6	重さ 7	SX1(7T) 級下崩		
80	鉄塊	長さ 1.9	厚さ 1.7	重さ 4	SX1(7T) 級下崩		
81	鉄塊	長さ 2.2	厚さ 1.2	重さ 4	SX1(7T) 級下崩		
82	鉄塊	長さ 2.2	厚さ 1.4	重さ 5	SX1(7T) 級下崩		
83	鉄塊系遺物	長さ 1.9	厚さ 1.3	重さ 4	SX1(7T) 級下崩		
84	第 21 回 P L 17	須志器 盖	口径： — 底径： — 高さ： [2.5]	①褐色 ②灰褐色 ③白色 ④白色	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SX1(7T) 一括	
85	第 21 回 P L 17	土師器 环	口径： — 底径： — 高さ： [3.8]	①褐色 ②白色 ③白色 ④白色	外面 口縁部横幅で、体部斜削り。 内面 口縁部横幅で、体部削て。	SX1(3T) 一括	
86	第 21 回 P L 17	須志器 环	口径： — 底径： [(9.0)] 高さ： [3.0]	①褐色 ②白色 ③白色 ④白色	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SX1(7T) 一括	
87	第 21 回 P L 17	須志器 (土師器 环)	口径： [(12.5)~ 13.0]cm 底径： — 高さ： [3.7]	①褐色 ②白色 ③白色 ④白色	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SX1(7T) 一括	
88	第 21 回 P L 17	土師器 小型器	口径： — 底径： — 高さ： [5.2]	①褐色 ②白色 ③白色 ④褐色	外面 口縁部横幅で、体部斜削り。 内面 口縁部横幅で、体部削て。	SX1(3T) 一括	
89	第 21 回 P L 17	土師器 瓶	口径： — 底径： [(15.0)] 高さ： [9.1]	①褐色 ②白色 ③白色 ④褐色	外面 体部削り。 内面 体部削て。	SX1(7T) 3	
90	第 21 回 P L 17	須志器 長颈器	口径： — 底径： — 高さ： [6.6]	①褐色 ②灰褐色 ③白色 ④褐色	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SX1(7T 西) 一括	
91	第 21 回 P L 17	須志器 長颈器	口径： — 底径： — 高さ： [(6.0)]	①褐色 ②灰褐色 ③白色 ④褐色	外面 ロクロ整形。 内面 黏土粘合上げによる強押さえ。	SX1(3T) 一括	
92	第 21 回 P L 17	須志器 長颈器	口径： — 底径： [(10.0)] 高さ： [4.5]	①褐色 ②灰褐色 ③白色 ④褐色	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SX1(3T) 一括	
93	第 21 回 P L 17	須志器 台付長颈器	口径： — 底径： — 高さ： [(2.6)]	①褐色 ②灰褐色 ③白色 ④褐色	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	SX1(3T) 一括	
94	第 21 回 P L 17	須志器 取瓶	口径： — 底径： — 高さ： [(3.2)]	①褐色 ②灰褐色 ③白色 ④褐色	内面 一部縫合が付着した金属溶解質が厚く 付着。 外側 底部右方向削り。体部右方向削り。	SX1(7T) 一括	
95	第 21 回 P L 17	平瓦	長さ 11.9 幅 11.6 厚さ 1.2 重さ 200	①焼成化び ②灰褐色 ③灰色 ④褐色	SX1(7T) 一括		
96	第 21 回 P L 17	平瓦	長さ 7.1 幅 9.9 厚さ 1.6 重さ 165	①焼成化び ②灰褐色 ③白色 ④褐色	SX1(7T) 一括		
97	第 21 回 P L 17	不明石製品	長さ 17.0 幅 10.5 厚さ 1.7 重さ 569	①白色 ②白色 ③白色 ④褐色	粘晶片	SX1(3T) 2	
98	第 21 回 P L 17	砾石	長さ 8.4 厚さ 7.9 重さ 430	牛糞砂岩	SX1(3T 表面部) 一括		
99	第 21 回 P L 17	打製石斧	長さ 15.5 厚さ 2.0 重さ 264	貝岩	SX1(3T) 1		

## 通横外出土遺物

番号	固形	器種	法量 (m・g)	①焼成・色調・断面	成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
100	第 22 回 P L 17	須志器 盖	口径： — 底径： — 高さ： [1.5]	①褐色 ②灰褐色 ③白色 ④褐色	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	4T 一括
101	第 22 回 P L 17	内里土器 盖	口径： — 底径： — 高さ： [(4.5)]	①褐色 ②外表面： 棒状 内面： 黑色 ③白色 ④褐色	外面 口縁部横幅で、体部削り。 内面 口縁部横幅で、体部削て後、ハラ削き。	7T 西 一括
102	第 22 回 P L 17	軟土質器 烟袋	口径： — 底径： — 高さ： [(5.5)]	①褐色 ②灰褐色 ③白色 ④褐色	外面 回転削削で、体部削て。 内面 回転削削で、	8T 一括
103	第 22 回 P L 17	砾石	長さ 7.6 幅 2.0 厚さ 2.0 重さ 54	砾石	砾石	8T 一括
104	第 22 回 P L 17	寛永通宝	横 2.5 × 高 2.4			1T 一括

写 真 図 版



調査前の状態（南から）



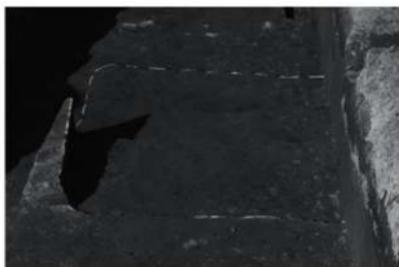
1号住居跡カマド 全景（西から）



2号住居跡カマド 全景（西から）



6号住居跡 全景（西から）



7号住居跡 全景（南から）



7号住居跡掘方 全景（南から）



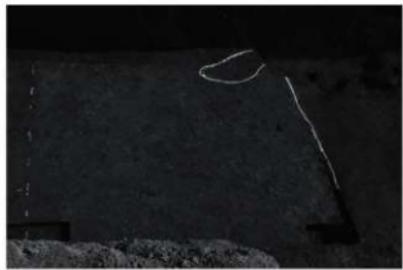
8号住居跡 全景（東から）



9号住居跡 全景（西から）



10号住居跡 全景（南から）



11号住居跡 全景（西から）



11号住居跡掘方 全景（南から）



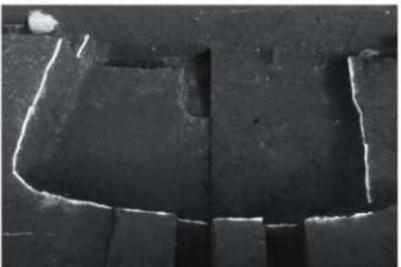
14号住居跡 全景（南から）



14号住居跡 全景（西から）



15号住居跡 全景（東から）



16号住居跡 全景（西から）



17号住居跡カマド 遺物出土状況（南から）



17号住居跡 遺物出土状況（1）（南から）



17号住居跡 遺物出土状況（2）（西から）



17号・18号住居跡 全景（西から）



19号住居跡カマド 遺物出土状況（西から）



19号住居跡カマド 全景（西から）



19号・20号住居跡 全景（南から）



21号住居跡カマド 全景（東から）



1号溝 全景（南から）



2号溝 全景（西から）



3号溝 全景（西から）



4号溝 南立上り（西から）



4号溝 南立上り（北から）



4号土坑 全景（西から）



5号土坑 全景（南から）



6号土坑 全景（西から）



Pit 1・2（左Pit 2・右Pit 1）全景（東から）



出土遺物 1 1～7: 1号住居跡、8,9: 3号住居跡、10～12: 4号住居跡、13: 5号住居跡  
14～16: 6号住居跡、17: 7号住居跡、18～20: 10号住居跡



出土遺物 2 1, 2: 1 2号住居跡、3, 4: 1 3号住居跡、5: 1 4号住居跡、6 ~ 8: 1 6号住居跡  
9 ~ 13: 1 7号住居跡



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

出土遺物 3 1～9: 1 7号住居跡、10～14: 1 9号住居跡



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

出土遺物 4 1～6: 1 9号住居跡、7～9: 2 0号住居跡、10～12: 2 1号住居跡、13, 14: 3号溝



1. SI 1 遺物出土状況（東から）



2. SI 1 掘り方検出状況（南西から）



3. SI 2 遺物出土状況（南西から）



4. SI 2 遺物出土状況（北から）



5. SI 2 掘り方検出状況（東から）



6. SI 4 完掘状況（東から）



7. SI 5 遺物出土状況（西から）



8. SI 5 遺物（No. 19）出土状況（北から）



1. SI 5 完掘状況（西から）



2. SI 5 カマド検出状況（西から）



3. SI 5 カマド C-C' 断面（西から）



4. SI 5 堀り方検出状況（北西から）



5. SI 6 遺物出土状況（北から）



6. SI 6 カマド天井石検出状況（西から）



7. SI 6 カマド甕設置面（北西から）



8. SI 6 カマド奥壁と煙道検出状況（西から）



1. SI 6 カマド燃焼部・煙道方向検出（西から）



2. SI 6 カマド F-F' 断ち割り（西から）



3. SI 6 カマド F-F' 断ち割り断面（南西から）



4. SI 6 カマド E-E' 断面（北から）



5. SI 6 カマド天井石・袖石



6. SI 6 カマド C-C' 断面（北西から）



7. SI 6 カマド奥壁立ち上がりから煙道傾斜（西から）



1. SI 7 遺物出土状況（西から）



2. SD 1 検出状況（西から）



3. SD 2 検出状況（東から）



4. SK 5 周辺土坑群検出状況（東から）



5. SK 8 周辺土坑群検出状況（西から）



6. SP 9～SP11 検出状況（西から）



7. SN 1 検出状況（西から）



8. SX 1 (3区) 硬化面堆積土層断面（東から）



1. SX 1 (3区) 検出状況（東から）



2. SX 1 (3区) 硬化面検出状況（南から）



3. SX 1 (7区) 検出状況（西から）



4. SX 1 (7区) 全景（西から）



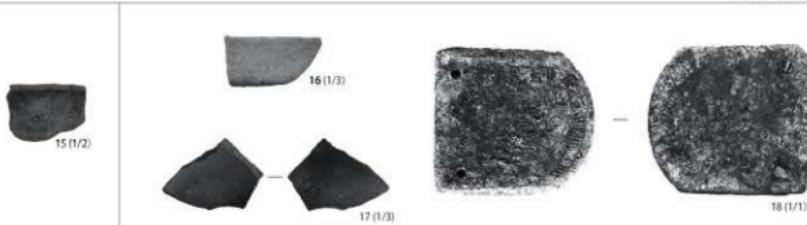
5. SX 1 (7区) 全景（東から）



SI1 出土遺物



SI2 出土遺物



SI3 出土遺物

SI4 出土遺物



SI5 出土遺物 (1)



S15 出土遺物 (2)



S16 出土遺物 (1)



P L 17



SX1 出土遺物 (2)

造模外出土遺物

発掘調査報告書抄録

ふりがな	しもこばなやしきうらいせき たいらひとつやいせき
書名	下小塙屋敷裏遺跡 多比良壱ヶ家遺跡
副書名	小規模農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第459集
編著者名	飯島克巳 小根澤雪絵
編集機関	高崎市教育委員会
所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地の1
発行年月日	令和3(2021)年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間 (m)	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
しもこばなやしきうらいせき 下小塙屋敷裏遺跡	たかさきし 高崎市 しもこばなやまち 下小塙町 あざやしきうち 字屋敷裏	10202	785	36° 21' 05"	138° 58' 32"	2020.1.6 ～ 2020.3.24	282	小規模農村 整備
たいらひとつやいせき 多比良壱ヶ家遺跡	たかさきしよしいまち 高崎市 よしいまた たいら 吉井町多比良 あひひと や 字壱ヶ家	10202	786	36° 14' 31"	139° 0' 22"	2019.12.26 ～ 2020.3.26	1,350	小規模農村 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下小塙屋敷裏遺跡	集落	古墳時代～平安時代	竪穴住居跡 溝	土師器・須恵器・灰輪 陶器	
多比良壱ヶ家遺跡	集落	古墳時代後期	竪穴住居跡	土師器・須恵器	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡	土師器・須恵器	蛇尾(金銅製)
		古墳時代終末～ 奈良時代	鐵精鍊または 鍛冶遺構	羽口・鐵滓・鐵塊系遺 物・砥石	炭化材・被熱粘土塊 を伴う被熱硬化面を 検出。

---

---

高崎市文化財調査報告書第459集

下小塙屋敷裏遺跡

多比良壱ッ家遺跡

— 小規模農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行日 令和3年3月29日

編 集 高崎市教育委員会文化財保護課

発 行 高崎市教育委員会

〒 370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1

電話 027(321)1292

印 刷 野島印刷株式会社

---

---